

日本慈濟世界

日本ツーカーセカイ

2021年12月10日出版

第170期

慈濟日本分會30周年專刊 下



慈濟做很多好事。即使生活不富裕，有人主動到商店四周介紹：「這就是由於感受到慈濟的愛，為表達感恩，忍心，會合大眾的愛心去幫助他們，為求生存甚至要去乞討。慈濟人不作機會，而當地的三輪車和吉普尼司機，因為沒有觀光客就影響收入，上這一波新冠疫情，情況更是雪上加霜。例如有許多視障按摩師少了工作機會，因為沒有觀光客就影響收入，有人主動到商店四周介紹：「這就是慈濟做很多好事。即使生活不富裕，

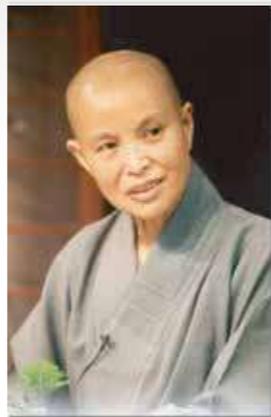
是要助人、造福，怎麼會有窮困的

在菲律賓實保和島、三寶顏等地，有些居民生活本來就比較困難，再加上這一波新冠疫情，情況更是雪上加霜。例如有許多視障按摩師少了工作機會，而當地的三輪車和吉普尼司機，因為沒有觀光客就影響收入，為求生存甚至要去乞討。慈濟人不忍心，會合大眾的愛心去幫助他們，由於感受到慈濟的愛，為表達感恩，有人主動到商店四周介紹：「這就是慈濟做很多好事。即使生活不富裕，

是

近來總是鼓勵大家「盤點生命」，回顧此生所做的事。我也一直在自我盤點，其中最有成就、最感恩的，是因為有你、有他，有這麼多人有志一同，走過五十多年的慈濟路。生命是隨著分秒消逝，而天下苦難偏多，我們要發人人生命的光，及時為人間付出愛，為黑暗帶來光明，發揮生命的功能和價值。

他們也願意捐竹筒，效法志工勸募或說好話勸素。



盤點生命勤造福

人？怎麼會你爭我奪？世間怎會不平安？只要用愛殷勤付出、為善競爭，不求物質享受，更多貧病殘疾的人即能得救。

回溯過去，盤點生命，我們能助人實在是有福之人，生命很有價值，值得讚歎。然而只靠少數人行善，力量很微薄、很有限，應該帶動群眾，人間菩薩廣招生，鼓勵於現在，力行於未來。希望大家發心立願，不求付出很多，只求翻轉人心向善，有善就有福，可以減輕災難。

行善不怕小、不怕少，只要開口說、動手做，累積心量、物量、力量，點點滴滴也能匯聚成江河，滋潤飢渴眾生。當社會累善積福，這股氣就會像一層保護膜，能讓世間多一分平安。



2022年

一月 January

《 日程表 》

◎東京23区 ◎關西地区 ◎群馬地区 ◎山梨地区

日	月	火	水	木	金	土
						1 元旦
2	3 代々木炊き出し配布 9:30集合	4	5	6 写経 13:30-15:30 手話 10:30-12:30	7	8
9 大阪西成区炊き出し 13:30-	10	11 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	12 (読) 仏典系列 13:30-15:30	13	14	15 ボランティア研修 (日本語) 10:00-15:00
16 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00	17 代々木炊き出し配布 9:30集合	18	19 (読) 仏典系列 13:30-15:30	20 写経 13:30-15:30	21 (読経) 《慈悲三昧水懺》 20:15-22:00	22 (読経) 慈悲三昧水懺 20:15-22:00 夜回り 17:30-
23 (読経) 《慈悲三昧水懺》 20:15-22:00 祈福感恩會 13:00入場	24 うらら障害者昼食交流 10:00-13:00	25 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	26 (読経) 《薬師経》 10:30-12:30 (読経) 《薬師経》 10:30-12:30 (読) 仏典系列 13:30-15:30	27	28 (読経) 《地藏経》 20:15-22:00	29 (読経) 《地藏経》 20:15-22:00
30 (読経) 《地藏経》 20:15-22:00 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00	31					

二月 February

◎東京23区 ◎關西地区 ◎群馬地区 ◎山梨地区

日	月	火	水	木	金	土
		1	2 (読) 仏典系列 13:30-15:30	3 写経 13:30-15:30 とうふく花園青山会 訪問 11:00-15:00	4	5
6 中国語大人クラス 13:00-15:00	7 代々木炊き出し配布 9:30集合	8 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	9 (読) 仏典系列 13:30-15:30	10 とうふく花園青山会 訪問 11:00-15:00	11	12
13 大阪西成区炊き出し 13:30-	14	15	16 (読) 仏典系列 13:30-15:30	17 写経 13:30-15:30	18	19 ボランティア研修 (日本語) 10:00-15:00
20 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00	21 代々木炊き出し配布 9:30集合	22 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	23 (読) 仏典系列 13:30-15:30	24 写経 13:30-15:30 (読経) 《薬師経》 10:30-12:30 (読経) 《薬師経》 10:30-12:30	25 (読経) 《慈悲三昧水懺》 20:15-22:00	26 (読経) 《慈悲三昧水懺》 20:15-22:00 夜回り 17:30-
27 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00 (読経) 《慈悲三昧水懺》 20:15-22:00	28 うらら障害者昼食交流 10:00-13:00					

※上記表は変更になる場合がありますので、参加する前に必ず事務局までお問い合わせ下さい。(読)→読書会

生命を見つめ直し 幸せ作りに励みましょう

訳 / 金子昭

この頃いつも、皆さんには「生命を見つめ直しましょ」と促し、この人生で行ってきたことを回顧するように勧めています。私もずっと自分自身を見つめ直しています。その中で、最もうまく行ったこと、最も感謝したことは、あなたがいて、あの人がいて、こんなに多くの同志がいたおかげで、ともに五十数年の慈濟の道を歩んできたということだと思います。生命は分秒単位で消えていき、この世界は苦難に満ちています。それゆえ私たちは人々の生命の光を啓発し、ただちに人の世のために愛を差し出す必要があります。暗闇に光明をもたらし、生命の効能や価値を発揮していかなくてはなりません。

フィリピンのボホール島やサンボアンガなどでは、暮らし向きがもとも苦しい住民たちがいます。これに加え、この度の新型コロナウイルスの流行のため、状況はいっそう厳しくなりました。例えば視覚障害者のマッサージ師は仕事の機会が減り、現地の三輪タクシーや乗合タクシーの運転手は観光客がいなくなつたため、たちまち収入に影響が出て、生きるために物乞いするまでに至りました。慈濟人はこのありさまを見かねて、人々の愛の心を一つに合わせ、彼らを支援しに行きました。そうすると、慈濟の愛を受け入れ、感謝の思いを表そうと、自ら商店のところまで来て周囲の人々に向かい、「これは慈濟です。良いことをたくさんしてくれました」と紹介する人まで現れました。たとえ暮らし向きが豊かなくても、彼らもまた竹筒貯金を行い、ボランティアを見習って募金活動をしたり、菜食を勧める話をしてたりしていました。

フィリピンの慈濟人には感謝しています。人数は多くはありませんが、彼らは心をこめて苦難を和らげ、貧困を救済しています。昨年から今にいたるまで、すでに二十万戸以上の家庭に生活物資を配布してきました。私たちは十分な手助けはできませんが、彼らは温かい心を受け取り、大きな支援の力を得ることができました。現地の企業家は自ら足を伸ばし、遠隔の地にも分け入って尽力することを望んだこともあり、現地の人々が自ら参加して愛の心を発揮してくれたことに感動したのです。

日々の米の蓄えの話をして、「一日は八分食へればいゅうぶんで、残りの二分で人を助ければ良い」と言って、皆さんを励ましてあげましょう。心の中でどんなに人を助け、幸せを作ろうと思っても、困窮した人はどうしたら良いのでしょうか。どうして私たちの間には争いがあるのでしょうか。どうして世の中は平和ではないのでしょうか。私たちは、ただ愛によって真心の力を尽くし、善のために競争し、物資の享受を求めなければ、より多くの貧困、病氣、障害に苦しむ人々を救うことができます。

て願を立て、たとえ多くを出さずとも、人々の心を善に向けさせるようにして下さいますように。そうすれば、善い人は幸せを得ることができ、また災難を軽減することもできるでしょう。

善を行うに当たっては、それが小さいこと、少ないことを恐れてはいけません。ただ口を開いて語り、手を動かして行いさえすればよいのです。心や物や力が蓄積していけば、その一滴一滴が集まってやがて大河になり、飢え渴いた人々を潤すことができるでしょう。社会が善を重ね、幸せを増していけば、この気風が世の中を保護するかのようになり、より多くの平和をもたらすことができるでしょう。

過去を遡って生命を見つめ直せば、私たちが人を助けることができるといのは実際、幸せな人だという事です。生命は価値があり、賛嘆に値するものです。しかしながら善を行う少数の人に頼っているために、力は微弱で限界があります。それゆえ人々を伴い、人間菩薩を広く募集して、今は励ますばかりですが、いつかは彼らに力を尽くしてもらわなくてはなりません。皆さんが発心し

過去を遡って生命を見つめ直せば、私たちが人を助けることができるといのは実際、幸せな人だという事です。生命は価値があり、賛嘆に値するものです。しかしながら善を行う少数の人に頼っているために、力は微弱で限界があります。それゆえ人々を伴い、人間菩薩を広く募集して、今は励ますばかりですが、いつかは彼らに力を尽くしてもらわなくてはなりません。皆さんが発心し



■上 フィリピンのドライバーが竹筒貯金箱を持って募金活動に参加する。写真 / 慈濟本部提供
■下 フィリピンに支給した物資の一部。写真 / 慈濟本部提供



慈濟基金會日本分會創立 30 周年 祝福のお言葉



台北駐日經濟文化代表處
駐日代表 謝長廷

慈濟基金會日本分會設立 30 周年、おめでとうございます！
慈濟基金會日本分會は 1991 年に設立され、日本に根を張って 30 年の間、これまでに急難救助、医療教育、人道支援などさまざまな公益事業の推進にご尽力され、国と国の壁を越えるのみならず、台日友好に対しても多大なる貢献を果たして来られました。
東日本大震災が発生して 5 日後、慈濟のボランティアの方々は車で被災地向かい、温かい食事や義援金を配布し、被災者の方々に感謝させました。またこの前、范明守くんが眼腫瘍の治療のため来日した際には、治療や隔離期間の日常生活のお世話もすべて日本分會が引き受けました。このような「人の痛みをわが身のよう」の博愛精神の実践に心から感動しました。ここに深い感謝の意を表します。30 周年に心よりお祝い申し上げますとともに、次の 30 年に向けて貴會のますますのご発展を祈念いたします。



台北駐大阪經濟文化弁事處
處長 向明德

慈濟基金會日本分會設立 30 周年をお慶び申し上げます。
設立 30 周年、誠にありがとうございます。慈濟基金會は長きにわたり、種族、国境、言語、皮膚の色、更には宗教も超え、惜しみない慈愛に満ちた献身の活動に心より敬意と感謝を申し上げます。
2018 年の豪雨災害被災地である岡山県倉敷市箭田地区で、最も被害が深刻だった被災者の「老眼鏡を取りに家に帰りたい」という願いを、道路規制があり車のない被災地で、慈濟ボランティアの皆様がアイデアを出し合って叶えたというエピソードに感動しました。一人ひとりの心に寄り添い、何ができるのか、何を求めているのかを懸命に考え、誠心誠意で取り組む姿に多くの方が心を打たれました。そして、台湾から来た慈濟と日本のご縁がこの 30 年という長きにわたり、一人ずつ、一つずつ結ばれてきました。心をつなぐ台日友好への多大なる貢献に改めて感謝申し上げますとともに、貴會のますますのご発展を祈念いたします。

台湾佛教慈濟慈善事業基金會日本分會設立 30 周年を心からお祝い申し上げます。

東日本大震災に際しましては、東松島市民に対し心温まる多大なご支援を賜り、誠にありがとうございます。改めて御礼申し上げます。

また、貴會の皆様には継続して「祈福感恩会及びお茶会」を開催していただくなど被災地に寄り添った活動をしていただいております。今後も様々なかたちで交流が続きますことを願っております。

東松島市では、国や宮城県の手厚い財政支援によりハード面の整備が完了し、今後は被災した方々に寄り添った「心の復興」に傾注してまいります。

結びに、2018 年花蓮地震の復興と貴會のますますのご発展と皆様のご多幸とご健勝をお祈りいたします。



宮城県東松島市長 渥美 巖

この度は、慈濟基金會日本分會創立 30 周年を迎えられたことに、心よりお祝い申し上げます。

慈濟基金會の皆様は、東日本大震災津波発災からわずか 4 ヶ月後の平成 23 年 7 月に、がれきが山積みで砂埃が舞う中、大槌町へお越しくださいました。その際、たくさんの町民の方々に優しく話しかけ、悲しみを癒し、心に寄り添ってくださいました。

また、これまで慈濟新芽奨学金の奨学生として、7 名の大槌町出身の学生が、ご支援を受け、勉学に励む日々を送っていることと思います。町民を代表いたしまして、心より感謝申し上げます。

台湾佛教慈濟基金會日本分會の皆様のご多大なるご尽力に感謝し、今後ますますのご健勝とご活躍をご祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。



岩手県大槌町長 平野 公三

慈濟日本分會設立 30 周年おめでとうございます。

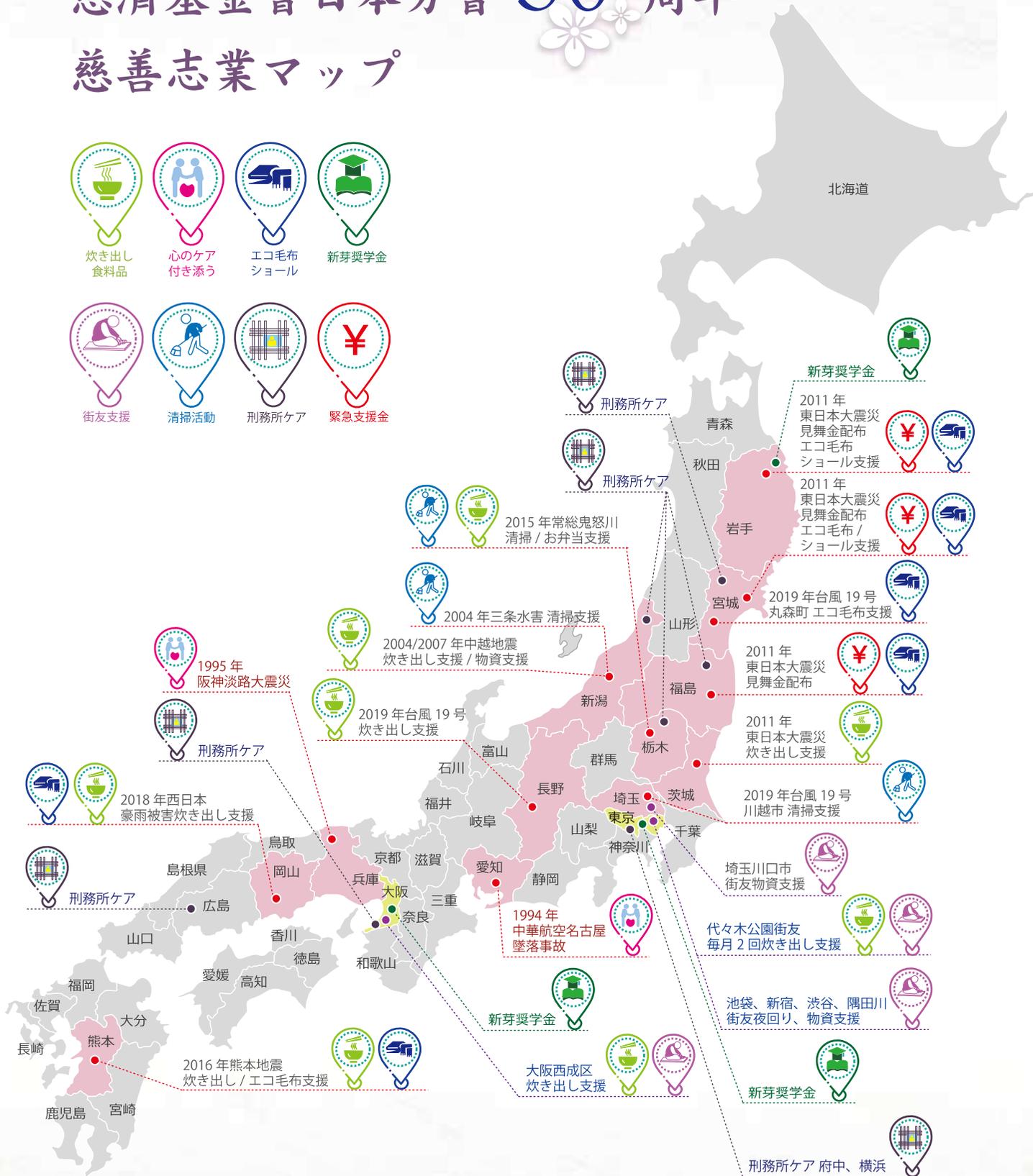
大阪支部の方々には、私たち釜ヶ崎の労働者への定期的ご支援を頂き大変ありがとうございます。越冬期の衣類や寝袋の提供を始め、毎年たくさんのボランティアの方々の参加により、年末の衣類配布、毎月の炊き出しをして頂きは 5 年が経ちました。皆様の困窮する者へ差し伸べる手は物資的援助と共に社会から排除され孤立しがちな困窮者が社会の一員であることを自覚できる精神的支えとなっています。

皆様の活動は感謝と共に私たちに大変勉強になります。この 1 年半ほどはコロナ禍で活動もママなりません。今後とも宜しくお願い致します。更なるご発展を願います。



NPO 法人釜ヶ崎支援機構
山中 秀俊

慈濟基金會日本分會 30 周年 慈善志業マップ



日本分会の三つの大きな出来事

30年間の歴史の中で、慈濟が日本社会で注目されるようになった大きな出来事は三つあると思います。最初の出来事は、2001年12月、10周年を記念して現在の新宿区大久保の慈濟ビルがオープンしたことです。拠点が確立したことで活動規模が拡大し、静思文化の普及啓蒙が顕著になりました。二つ目は、2007年5月、證嚴法師が庭野平和賞を受賞されたことです。宗教の社会貢献の一つのモデルとして、慈濟が与えた影響はとても大きいものがあります。そして三つ目は、2011年3月以降、東日本大震災に際して行われた義援金給付活動です。この活動は被災地の人々だけではなく、全国の人々の心を温め、勇気づけました。これからも、人間菩薩の皆様による大きな愛の活動が、日本社会に「善の循環」を展開していくことを心より祈念いたします。



天理大学哲学博士 金子昭

このたびは設立30周年を迎えられ、誠にありがとうございます。この日を迎えることができたことは、ひとえに執行長をはじめ、職員皆様がたの地域社会に貢献、慈善事業による御尽力の成果と畏敬の念であります。昨今のコロナ禍であり、社会情勢の変化の激しい世の中で、一つの奉仕団体が継続するというのも重ねて敬意を表します。御基金會につきましても、いくつもの困難があり、人知れぬご苦労と工夫で今日の活動を成し遂げておられますのは、ひとえに日々の努力を継続された賜物と存じます。本学の新芽奨学生もこれまで6期生を数え、延べ42名をご選出頂いており、感謝の気持ちでいっぱいです。本学も43周年を迎え、令和4年4月より校名を町田・デザイン専門学校から「町田デザイン&建築専門学校」と一新、変更し、専門分野の人材輩出に一層尽力してまいります。まさに「温故知新」、建学の精神に則り、時代に適応すべく邁進していきます。今後も、御基金會にご選出頂けるような学生を推薦し、共存共栄を図れる様、さらなる飛躍を共にとげられんことを祈念いたします。



学校法人 東京町田学園
理事長 井上 博行

この度は日本分会三十周年に対し皆様のお声を寄せて頂きありがとうございます。多くの方々のお力を得てこの三十周年の節目を迎えることができました。どうぞこれからも引き続き皆様のご助力を賜りたくよりしくお願いいたします。

御礼申し上げます

《上記以外のご協力の方にも感謝致します》

住所：〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16

電話：03-3203-5651

FAX：03-3203-5674

E-MAIL：tzuchi@tzuchi.jp

郵便口座：00190-4-753352

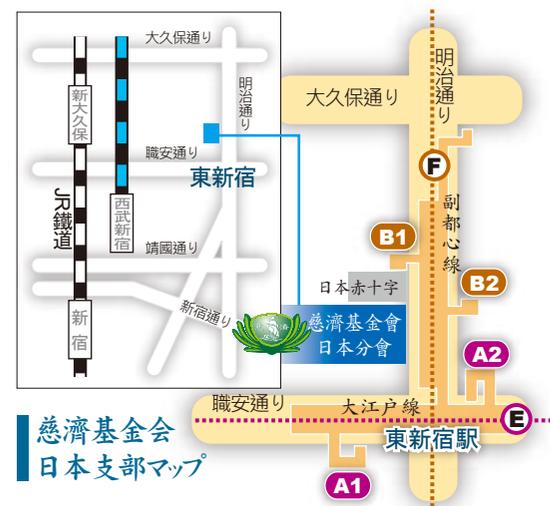
口座名義：仏教慈濟基金会
ブツキョウジサイキキンカイ

時間：毎日 9:00 - 17:00

HP：<http://tw.tzuchi.org/jp> (日本)

HP：<http://www.tzuchi.org.tw> (台湾)

いつも「日本慈濟世界」にご支援頂きありがとうございます。これからもご協力下さいますよう、宜しくお願い致します。



【日本慈濟世界】
ホームページ



表紙写真：

證嚴上人最近一直在說「火金姑」，螢火蟲閃閃發亮，哪怕螢火蟲很小，只要黑暗的地方，螢火蟲群飛起來，很壯觀。一燈能破千年暗，即使燈光微弱如螢火蟲的微光，但是多盞點亮，就能盡破黑暗。眾人的小小的愛心若能被啓發，匯集起大愛，必能為這世間造大福，邀約人間菩薩一起來造福。攝影 / 日本分會

上人開示 (證嚴法師の教え)

01 盤點生命勤造福

釋證嚴

02 生命を見つめ直し

金子昭

訳

04 慈濟基金會日本分會創立三十周年に
お祝いメッセージ

07 日本慈善志業統計表

日本分會30周年専刊下

慈善篇 (慈善編)

10 訪視志工 拉長情擴大愛

陳靜慧

34 訪問ボランティア 大愛を拡大す

吳俞輝

訳

12 一方有難 十方馳援

許麗香

37 一方に難があり
十方かり援助を駆けつける

朱家生

訳

14 通信傳大愛 日本慈濟關懷監獄受刑人
愛を伝えよう

黃韻璇 陳靜慧

16 溫暖的依靠
日本慈濟が受刑者の心のケアを

岩村益典

訳

43 寄り添う温もり

陳詩萍 整理

18 一線光明 小兒眼癌團隊

李曉萍

46 一筋の光 小兒眼がんチーム

林真子 陳雅琴

訳

20 愛為雨露 新芽助學關懷

岩村益典

49 慈雨如くの愛で新芽ケア

陳靜慧

訳

鄭文秀

訳

功能組篇 (功能グループ編)

21 大型活動的緣起與回首

許麗香

50 ビックイベントの経緯

王珠惠

24 環保與素食愛地球行動

王秀寧

55 三活動と菜食主義 地球を愛す

伊佐

26 守護的力量 培訓續人才

許麗香 王秀寧

58 守る力 新たな人材を育む

王譽秦

其他篇 (その他編)

27 社區教育生涯學習不間斷

陳雅琴

62 地域における生涯學習人間死ぬまで勉強

張靜華

28 從流通處到靜思小築

河田瑞穗 黃韻璇

59 流通處から靜思小築へ

水谷瑞芳

展望篇 (展望編)

30 慈青的緣起與展望

張秀民 鍾佳玲 謝玉潔

64 若き力 慈青回顧録またその展望

井田龍成

32 日本視訊讀書會緣起與展望
67 日本分會オンライン讀書会の
開設とこれからの展望

陳麗芬 真鍋誠

訳

日程表

表紙裏 二〇二二年一、二月行事曆

王昆京

訪視關懷 是諸眾生真善知識

訪視志工 拉長情擴大愛

撰文／陳靜慧

生命究竟是明天先到？還是無常先到？人生的生老病死，無可避免，又常常令人措手不及，又驚又慌！慈濟以慈善起家，訪視志工，聞聲救苦，奔走長街陋巷。



■ 1 慈濟志工協助柳先生辦理回國諸般手續。攝影／林真子
■ 2 慈濟人受託愛的接力，陪伴尾村先生至往生。攝影／慈涓

醫病陪伴

日本分會成立不久後，一九九四年為了幫四歲的凱凱圓夢，有限的人力第一次總動員。凱凱在血癌骨髓移植失敗，生命最後父母帶他一遊日本狄斯尼樂園。來日五天，志工全程陪伴家人與凱凱，圓最後之夢。

二〇〇六年，一通來自臺北「請救救我的兒子」的電話。年輕的陳寶倫因病需到日本接受先端治療，媽媽請求協助翻譯與院方溝通。順利來日後，歷經一

個月治療，每週志工前往陪伴，很幸運的治療非常成功。寶倫的父母回到臺灣後，因為感恩開始加入慈濟的環保志工。

醫病的陪伴，不分國籍。二〇〇九年志工提報來日籍的加賀先生，長期臥病，家裡充滿異味，躺在腐壞的榻榻米上。經與區役所等相關人員商談後，安排三十位志工前往，幫忙清空雜物更換榻榻米，會木作的志工幫忙做出無障礙空間並鋪上塑膠地板。

陪伴，短則幾天，有時數月。二〇一四年，三歲多的龍雪因不明原因的腦炎後遺症，需要復健，志工展開長期輪班協助翻譯。二〇一五年，七歲的可嘉因病，從中國來日治療數個月，期間志工幫忙找房子、安定生活、陪伴翻譯，住院期間輪流送上愛的便當。病苦最苦，折磨身心與意志。訪視志工林真子常常用假日或上班前後的時間，在醫院裡守護陪伴舉目無親的病患與家屬，從就醫、

翻譯、申請補助、入院、住院到復健等等，無所不幫。

長者關懷

分會也經常接到流落街頭，或孤苦無依的長者個案提報。臺籍老兵李仙賜，戰後流落九州沒有身份，孤苦一人親人失聯。一九九六年友人報請協助，慈濟與臺灣戶政單位合作查詢下，找到了失聯五十多年的弟弟。家人已為他申報死亡，必須申請戶籍，讓死人「復活」。等待期間，親人來日，相隔半世紀而重逢。

二〇一〇年，志工接到一封留學生來信，期盼慈濟人能幫忙照顧獨居、身體衰弱的尾村文朗老師。原來，尾村先生早年積極前往各日語學校，主動照顧台灣留學生，免費教導日文，家門隨時為學生們敞開。志工依信找到後定期探視、陪伴用餐、打掃房子。尾村先生說自己努力地活著，因為他愛這些孩子，愛臺灣。生命最後志工也以愛回報，到

他二〇一三年安詳往生。

當歲月老去，何處是故鄉？二〇一八年，六十多歲的柳耀文背著大背包來，請慈濟幫助他回國。他早年來日留學，中途輟學非法打工，護照早已遺失。因為失業，積蓄用完，開始露宿街頭，最後病倒在路邊，被警察送往就醫。非法居留二十多年，向志工求援的三十二天後，辦完程序，找回了身份順利回臺。臺灣志工接手關懷，如今已經順利找到工作，有了新的生活。

往生助念

遍佈全球的慈濟人，彷彿出外人的護身符，趕往現場，伸出援手；其中，往生助念，是為了解亡者靈安，生者心安。

一九九五年，神戶留學生安安因乳癌往生，家屬搭機前請求日本分會，志工趕往醫院助念，陪伴著她的同學們一起守靈二天等待家屬。同年，三十多歲的臺籍留學生因愛滋病，情況危

急，來日後發病的他選擇死在異鄉，也不願回臺連累家人。

在旅遊旺季時，來日旅遊遇難的事件層出不窮，多年來日本分會接獲過無數的求助：車禍、意外墜樓、輕生、他殺、腦溢血、心肌梗塞、腹膜炎、動脈剝離等等。無常來時，不分對象年紀，志工陪伴走過許多生命的最後，也陪伴心碎的家屬。

二〇一〇年東京某醫院來電希望慈濟協助翻譯。何小弟弟因小兒腦腫瘤，曾幾次手術，這次因發高燒，緊急手術後仍敵不過病魔。志工們分批前往助念。去年二〇二〇年四月疫情嚴重時，爸爸何先生送來一片口罩，說要保護志工，現在的他已成為慈濟的志工，愛的循環溫暖人心。

心靈陪伴

愛的陪伴，需要象人之力。二〇〇六年一位無助的黃女士即將生產緊急來電。訪視志工林素子請她自行先叫救護車前往醫

院。隨後，志工兵分三路：聯絡其男友、代為照顧一歲長男、協助回臺手續處理。大家輪流照顧起男孩，媽媽出院後繼續幫忙打掃家裡、購物、為嬰兒洗澡，照顧保護母子三人平安回臺。

二〇〇七年，古谷珊伊發生腦溢血，經過急救後恢復意識，在療養復健的三個月，訪視志工呂瑩瑩等人暫代母職，前往古谷家協助煮飯打掃，陪伴四個孩子。瑩瑩因與珊伊住得近，隨傳隨到，情如姊妹。喜愛讀書的珊伊拄著柺杖，不久即加入日本志工行列。

二〇〇八年，臺籍廚師林先生工作中腦溢血倒地送醫。太太劉申金因不會日語，慈濟人協助翻譯，陪伴復健、申請社會資源等，申金感動慈濟人的溫馨，這許多年來，常常來慈濟做志工回饋。

「有苦的人走不過來，有福的人就要走過去！」哪裡有需要幫助的人，日本慈濟人就向哪裡伸出援手，三十年如一日！

一方有難 十方馳援

撰文 / 許麗香

大型急難救助 是諸眾生大良福田

證嚴上人叮嚀海外的弟子：「頭頂人家的天，腳踏人家的地，要取之於當地，用之於當地，回饋當地社會。」然而，在福利制度完善的日本，行善有如石頭縫裡找尋愛的出口，尤其碰到大型災難的時候，要付出愛心，是要難行才能行。

日本分會的大型災難援助，是從一九九五年四月華航名古屋空難旅客家屬的關懷援助開始。

新潟水災清掃支援與地震援助

二〇〇四年七月新潟三條水害，東京的志工動員，跟群馬志工會合，前往三條市協助鄉親打掃家園，藍天白褲的志工身影，首次在水災過後的地區，發揮助人的力量。同年十月新潟中越地震，志工在地震後第二天，突破肝腸寸斷的道路，比平常四倍多的路程，將一百五十套全新的寢具，以及乾糧飲料水，順利送達災區，接著在小千谷展開首次的災區熱食與物資發放。也因為踏出這一步，二〇〇七年七月同樣發生在新潟的柏崎地震，志工快速動員前往提供熱食，溫暖鄉親驚惶的心。

3.11東日本大地震援助

二〇一一年三月十一日，東



■ 1 東日本大地震災慈濟日本分會共計 10 梯次前往東北發放見舞金。攝影 / 花蓮本會提供

■ 2 倉敷市真備町，志工協力連續 9 日提供熱食。攝影 / 孫素秋

日本大地震，引發海嘯、核災等複合性大災難。五天後志工前往茨城縣大洗町提供熱食。接著台灣救災物資抵達日本，二十四日至二十七日志工前往岩手縣、宮城縣災區發放物資並展開勸災。

並提供新芽助學金。我們珍惜因緣，讓愛的牽絆不間斷。

在世紀性的災難發生後的東北，各地區役所疲於解決鄉親的苦難，無暇接應外來的援助團體，慈濟志工要踏出援助的第一步，是難上加難。幸有證嚴上人不斷的關懷與指引賑災的方向，志工契而不捨，不畏艱難的來回溝通協調，才促成往後見舞金發放。

悠悠鬼怒川怒吼
暖暖慈濟愛馳援

二〇一五年九月，受颱風 18 號影響，發源於栃木縣日光市的鬼怒川氾濫，多處潰堤，志工動員前往常總市勸災，並展開賑災工作，除了協助受災鄉親清掃滿是淤泥的家園，走訪避難所關懷鄉親，並協助常總市役所清掃環境，及救災物資的分類整理，也即時提供市役所職員四百個素食便當。並代表證嚴上人，對數位來自台灣受災的鄉親，送上慰問金，以及烹調用具與毛毯。

本縣大津町每日供應熱食。
慈濟人每天用心變化菜色，熱熱的蔬菜湯或八寶菜補蔬菜的不足，還有來自台灣的靜思茶，更是深獲避難鄉親的感動與歡喜。也帶動避難鄉親一起來清洗備菜，而因地震停課的年輕學子，協助製作每天的供餐海報，跟志工交上好朋友，長期持續的互動。

西日本豪雨賑災

二〇一八年七月，西日本豪雨成災，關西慈濟人前往岡山縣倉敷市真備町勸災，七月十二日起，連續九日間於二萬小學校提供熱食。志工分批自東京、大阪來會合，準備熱食的空檔，隨時協助物資分類與清潔的維護。除了提供受災鄉親清掃家園用的發電機，並致贈受災中小學學童校內供餐時穿著的裝備。之後，關西志工仍然與當地的志工團體保持聯絡，像極了一家人，彼此珍惜情緣不間斷。

19 號颱風受災害
颱風 19 號（海貝思）造成日本七個縣的七十一條河川潰堤氾濫，受災地區零星分散。日本分會隨著短中長期的賑災方向，十月十八日排除萬難，先送了千件毛毯到宮城縣丸森町。十九日慈誠師兄前往到長野勸災。二十日，志工分兩梯次到埼玉縣川越市協助清掃。十一月八日送二百五十人份的熱食以及熱熱的靜思茶到長野縣豐野町。大家莫不秉持著人溺己溺，人苦我悲的心境，期待能為寒冷的人送一份溫暖，為需要的人送一份熱食。

六月九日至十一日首梯次見舞金於岩手縣釜石市、陸前高田市發放，其後，總計十梯次前往，計於二十六市町村發放，金額約五十億多日圓，發放九萬六千多戶。八月與釜石市簽訂「援助營養午餐與校車」協議書，援助釜石市中小學營養午餐以及校車的燃料費。

二〇一六年四月，熊本縣發生七級強震。志工本著「人傷我痛，人苦我悲」的胸懷，自四月二十二日至五月十四日在熊

關懷熊本強震
日本慈濟人緊急動員

回首三十年來，一雙雙的繡花鞋，為日本分會印下了一雙雙的足跡，而在大型的賑災活動，除小小繡花鞋，增添了師兄們的大腳印，在事前的籌備階段，一起寫下印記。期待今後有更多的人間菩薩湧現，讓我們有更多的力量，成為苦難人的依靠，為飢餓的人端上一碗熱湯，為黑暗的角色點一盞燈。



監獄關懷 是諸眾生不請之師

通信傳大愛

日本慈濟關懷監獄受刑人

撰文／黃韻璇 陳靜慧 攝影／慈涓

一般人印象中，監獄是令人避諱的，不受歡迎的社會暗角，裡面拘禁著一群因為觸犯法律而必須付出代價的受刑人，在獄中過著與世隔絕的生活。



1 志工用心回信鼓勵來函者。

2 受刑人透過駐外辦事處捐獻金錢與物資，援助常總市受災災民。物質雖然有限，然而愛心無價。

一九九五年日本分會成立第四年，慈善的腳步走入了監獄。法廣師父（當時志工黃素梅）回憶起那時的因緣，是跟著天主教會關懷死刑犯，前往探望馬來西亞籍阿黃（假名），送他慈濟的《靜思語》、《慈濟道侶》、月刊等。隔年，阿黃的母親來日出庭，志工一路陪伴，她告訴志工：「兒子兒時乖巧，會幫忙做家事……」，每個受刑人的背後，都有一個故事。

慈濟刊物安定受刑人的心

一九九七年東京拘留所一位小博（假名）寄來一封討論佛法、人生哲學的信件，第二次來信時，訴說自己如何走上不歸路。志工鼓勵他多看佛書，並贈送慈濟刊物、內衣褲等。一九九八年，中國籍受刑人小宗（假名）從拘留所來信。他為了來日打工，借債並非法入境，幾天即被捕。語言不通，思念家

在黑暗的地方點一盞燈

志工們由書信潛移默化鼓

勵受刑人重新肯定自我，曾有位二十多歲的受刑人，在監獄自學英日韓文等多種語言，志工熱心幫他找原文參考書，希望他能在困境中找到正向能量。

還有一位受刑人看了月刊上的訊息，透過外交部駐橫濱辦事處寄來了捐款，以及好不容易存起來的物資，想要援助當年常總市水災災民，物質雖然有限，然而愛心無價。

另一位受刑人秋秋（假名）說，志工寄給她的書籍、靜思語、雙月刊上面的中文字等等，讓她的心可以暫時回「家」，所以她都視為寶物。看到義賣素粽的訊息，雖然鐵窗另一端的她吃不到她還是用她在監獄裡少少的收入，訂了素粽，請志工寄給關懷過她的日本朋友。

最鼓舞人心的莫過於受刑人轉為志工的故事了。二〇一五年在日本服刑六年多的王琳恩出獄回臺。當初他誤交損友，敗光家產，更欠下鉅額賭債，最後鋌而

走險運毒，第一次就被查獲。服刑第四年妻子到法院訴請離婚獲准，他精神大受打擊，獄方強制就醫，每天必須服用鎮定劑。他寫信給大阪的駐日代表處，表明自己死後，希望能代為處理後事，代表處因此聯絡慈濟志工前往關懷。

關西志工余瓊珠、林淑芬開始以書信關懷互動到他出獄。從刊物中他讀到更生人慈濟志工蔡天勝的故事，試著寫信到臺灣，從此一人隔海書信往返。回臺後的他聯絡蔡天勝，成為慈濟志工。目前，常隨著蔡天勝到各大校園與監獄之間，分享自己重生的故事，鼓勵受刑人勇敢走出自己的路。

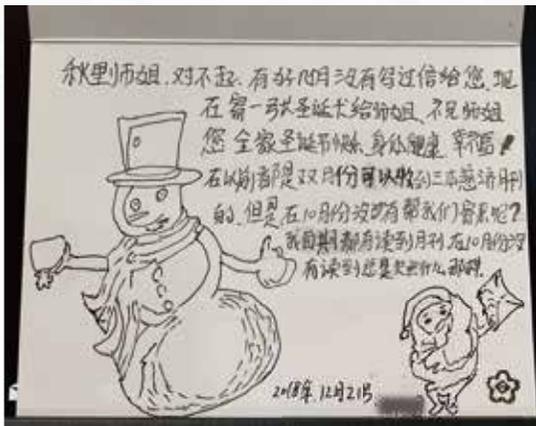
眾生平等 愛無差別

誤入歧途的生命，改邪歸正展開人生的新頁，是給志工最大的鼓勵。二〇一一年十月日本分會一樓書軒來了位先生，假釋

中的他專程來向志工道感恩，並捐款到小竹筒內，說是一點小小心意。他告訴志工當初因年輕不懂事，加入不良組織，販賣毒品所以被捕。他感恩慈濟的刊物陪伴了他十多年，報導的內容常常讓他很感動。離開前他說：「以後有機會，一定跟你們一起去做法會。」

慈濟人用有溫度的問候來關懷受刑人，期待他們來日走出黑暗，邁向光明大道。多年來，受刑人間也會在監獄內互相介紹慈濟，所以日本分會至今仍不定期的收到從監獄寄來的信函。只要有愛心，地獄也可以改造成天堂。

上人曾開示：人人本具佛性，但是「一念之差步步皆錯，要再回頭實為不易。不過只要心起覺悟、下定決心，周圍有善知識牽引、拉拔，終會改變。」一念之差可以為善，也可以為惡。善的種子已經種下，等待的是，因緣成熟能開枝散葉！



受刑者於過節時寄來自繪問候賀卡，令志工們感動不已。



志工仔細地閱讀受刑者來函。

街友關懷 是諸眾生安穩樂處

溫暖的依靠

整理 / 陳詩萍

慈濟日本分會從一九九五年三月開始，首次與天主教山友會合作製作飯糰，關懷隅田川街友；同年來自台灣鑲有「慈濟」標誌的五百條睡袋如期運抵東京，十一月展開寒冬送暖活動以來，慈善的腳步不停歇。現在除了代代木公園熱食發放、夜訪街友、每年冬令發放外，關西慈濟人也加入這個愛的行列中。



■ 1 二〇〇六年一月，在新宿中央公園北口，日本分會首次自辦為街友提供熱食。攝影 / 慈濟

■ 2 因應疫情，代代木現場熱食發放改為當日製作便當，溫暖依然不減少。攝影 / 日本分會提供

願大力就大

日本政府規定，只要發放都需要經過申請，而且日本慈善團體很多，所以一開始志工大多與其他慈善團體配合。一場由新宿區街友關懷委員會團體舉辦的研討會，讓志工認識「新宿街友聯絡會」的負責人，經多次前往發放現場探查，並取得同意之後，二〇〇六年一月，在中央公園北口，日本分會首次自辦為街友提供熱食。

難得的機會，讓大家戰戰兢兢，集思廣益，從決定發放飯糰、熱騰騰的什錦味噌湯以及生活日用品，到各功能組的人力分配、現場動線、車輛調度、器材清單等，大小事項都不放過，合心協力期待有最圓滿的結果。然而之後因收到公園管理當局的通知，儘管街友非常期待，這次的發放僅此這一次。

在因緣俱足下，二〇〇九年三月，開始在東京代代木公園為街友定期發放熱食，目前為每

個月兩次。多年來有些志工即使只能撥幾個小時付出，也都把握機會，接力完成。這一項慈善工作起源於二〇〇八年美國雷曼風暴造成嚴重失業潮，志工關懷失業民眾開始。

二〇〇九年初，日比谷公園設有失業者派遣村，慈濟人在半日內，動員志工連夜準備，前往日比谷公園煮熱食，讓街友關懷跨出一大步，而有了每月第一跟第二個星期一的代代木熱食供應與物資發放的因緣。同年十二月，透過與慈濟合作多年的山友會，聯繫上了食物銀行，決定在上野恩賜公園舉行了第一次以毛毯為重點的冬令發放。動員五十餘人，毛毯五百條，慈濟人不畏低於九度的氣溫，為的就是想在過年前傳遞溫暖的心意給街友們。

募街友們一份善念

二〇一一年三月十一日，日本突遭地震及海嘯劇變，東

愛在關西蔓延

二〇一五年一月，關西志工第一次為西成區街友進行冬令發放毛毯活動，在寒冷的冬季送上滿滿的祝福。

二〇一六年再次進行大規模的內衣毛巾組以及毛毯的發放。志工們數次透過當地NGO釜崎團體，了解當地街友現今面臨的問題。之後，經過再三評估，決定在二〇一七年四月於西成區勞動中心後面的「愛鄰緊急夜間避難所」，進行第一次熱食發放，自此每個月第一星期日為入居者提供熱食。每次約有十多位志工參加，除了在地的臺灣志工以外，也有中國、印度、馬來西亞等多國籍的人士一起來參與。

二〇一八年十一月開始，除了為「愛鄰緊急夜間避難所」的入居者提供熱食以外，又增加了為露宿在外的街友，送飯糰及夜間關懷。

愛的關懷不停歇

二〇二二年三月，街友關懷走入社區，北和氣志工在住家附近的川口車站地下道，每月兩次，於夜間關懷約十二位街友，除了飲料乾糧水果，也隨季節補充襪子毛毯毛巾或是口罩等物資。志工們本著「人傷我痛人苦我悲」的同理心，持續關懷街友們，也祝福著他們的下一餐，不再愁苦，而是幸福！



■ 川口車站地下道，每月兩次，志工於夜間關懷露宿街友。攝影 / 蘇美菁



■ 志工於西成區「愛鄰緊急夜間避難所」進行冬令物資發放。攝影 / 日本分會提供

北地區的災民是全國送愛的目標，志工持續在為東北賑災盡心力的同時，也沒忽略每月的街友溫暖。同年五月，日本分會第一次舉辦室外浴佛，對象是街友，地點在代代木公園。志工們帶動街友填寫「祈願卡」，希望大家能為世界和平、天下無災難而發願，還有為東北災民、為自己平安的祈福。

志工長期跟街友互動，發放熱食和毛毯，慢慢建立了信任，並試著邀請街友一起來參加掃街行動，本來大家都做好了可能會被拒絕的心理準備，沒想到還是有街友願意來響應。

因為代代木公園的熱食結下緣份的街友柏木冬樹，在接受關懷後，想要更進一步認識慈濟，想要見到證嚴上人，特地花了兩年籌措機票錢，二〇一四年三月八日圓了夢，踏上台灣，到花蓮精舍尋根。回到日本後更常穿起灰色志工服付出，直到二〇一七年圓滿此生。

眼癌關懷 救處護處大依止處

一線光明 小兒眼癌團隊

撰文／林真子 陳雅琴 整理／陳詩萍

發現眼癌腫瘤後，有時父母會面臨艱難的選擇
「是孩子的眼睛重要？還是孩子的命重要？」



■ 志工前往接機後，一路陪伴。攝影／林真子提供

成為新手爸媽的父母們，在適應新生命誕生的喜悅與手忙腳亂中一定沒有想過，突然有一天你得被迫接受一個從不曾聽過的病名——「視網膜母細胞瘤」，小兒眼癌的一種，通常發作於三歲以前，新生兒發生率為一萬五千到兩萬分之一。在腫瘤發現後，家長開始面臨一段和命運之神長期搏鬥，有時進退為難，有時天人交戰。每個孩子都是父母的心肝寶貝，他們更希望尋找可以保住生命也不必摘下眼球的治療法。就是到日本跨國尋醫。

天涯就醫 · 慈濟相伴

二〇一〇年九月慈濟日本分會接到了一封來自臺灣的信，是即將帶孩子來日本治療眼癌的父母寫來，也因這個因緣，開啓了眼癌關懷行動。

這些孩子在臺灣通常都治療了一段時間，父母為尋求最後一線希望，不惜龐大的醫療費，

有的借錢，也有賣房子，只盼不留遺憾。

人生苦這些孩子更苦，證嚴上人說：「菩薩所緣，緣苦眾生。」因為不捨他們，志工們更要築一道很強的保護網讓他們安心，訪視團隊這幾年來陪伴了反覆來就醫的親子，從趕往機場為人生地不熟語言不通的家長接機，努力為家長們一家家打聽離醫院較近的便宜旅館，協助聯絡醫院和醫師，帶家長們買生活用品等。翻譯團隊用自己許可的時間去翻譯，帶水果、做便當，大愛接力，讓每一個療程都能順利完成，讓家屬不安的心減到最低點。

「跟這些爸媽所面臨的挑戰比起來，我們的付出真的不算什麼。」志工們在訪視的會議上分享心得，也呼籲大家一起來陪伴與關懷。

志工林真子曾經接到從臺灣打來泣不成聲的國際電話，「她用國際電話跟我說了快十分鐘，我還是聽不懂媽媽在講



什麼，她只是一直哭，一直哭：「原來是曾在日本陪伴過孩子就醫的媽媽打來的。電話中的媽媽曾經為了孩子用盡一切力量，帶著孩子四處求醫。當發現搶不回視力時，拼了命試圖要保留住孩子的眼球不摘除；當發現搶不回眼球，最後一絲希望是要從命運之神手中搶回孩子的命！可是「孩子走了！我的心也被媽媽哭碎了！」因為不捨，讓真子堅定協助眼癌關懷的這一條路。

大愛接力 · 隨時補位

二〇一〇年，第一起就醫案例是從埼玉縣的醫院開始，之後主治醫師異動後無法持續，家屬打聽到東京都內的國立癌症研究中心醫院有專業的醫師，但卻不

■ 1 志工金媚湘（左）事前事後溫暖陪伴。攝影／日本分會提供

■ 2 志工黃韻璇（左）加入團隊後深感受益最多的是自己。攝影／日本分會提供

得其門而入。慈濟志工協助聯絡，懇請原主治醫師寫介紹信後，孩子們終於能順利持續跨國的醫療。到二〇一〇年十二月止，約有三十多位孩子來日治療，每次療程四到七天。十年來曾參與輪班的志工約有七十位。

每次得知即將有小朋友來日治療的訊息後，眼癌關懷小組就會在群組上請成員們認養陪伴日期。尤其是志工金媚湘，會將所有的前置流程及事後就醫說明，紀錄得非常完整，林真子更是隨時補位，是家長及醫生間溝通的橋樑，也是小組的定心丸。

媚湘分享，在陪伴的過程中，有時家長一時無法接受，不斷的重複詢問同樣的問題問醫生，當下除了要作好兩方的翻譯之外，還要安撫家長的情緒，這一路走來自己學到很多並從中成長，很感恩有這個機會。

志工們棒棒接力。林幸津在協助翻譯的過程中，除了陪伴，並將自身的經驗傳遞給對方，讓父母親的心情找到出口。

周其德是在林真子的鼓勵下加入團隊，每一次都讓她很難忘，也會到心量大才能發揮大愛。黃韻璇加入眼癌醫療翻譯團隊後，最難忘的是面對無常卻不放棄任何治療機會的父母們，深深感覺到能做別人生命中的貴人，受益最多的其實是自己。

井田音心不忍這些孩子們，希望每次訪視都盡量帶給他們有希望的感覺。陳雅琴在每次辦好出院後，都會陪著他們一路走到地鐵站，祝福他們一路平安。

一直到現在還有家長回饋，如果沒有慈濟的陪伴，這一段辛酸路不曉得怎麼走，如果沒有帶孩子來治療以後自己可能會後悔等等，天下父母心，對孩子的愛是無盡的。一路陪伴深刻體會靜思語「見苦、知福、惜福、再造福」。感恩三、四十個家庭以身說法，提醒我們要珍惜父母給予的健康身體並回饋社會，也感恩這些勇敢的小朋友，在自己的生命中走過，讓我們有陪伴他們的機會！

新芽助學金 從一種子生百千萬

愛為雨露 新芽助學關懷

撰文／河村吉美

富裕的國家也有暗角。慈濟日本分會志工早有意願要設立助學金，幫助弱勢的國小到高中的學子，但是十多年來不得其門，直到轉向改為評估幫助弱勢家庭的大專學子，才啟開了助學金的慈善志業。

二〇一六年，因慈濟會員的介紹走入町田設計學院，希望透過助學金幫助弱勢家庭的學子，不要因為經濟拮据，半工半讀無法專心學業而中途輟學，也期待受惠學生可以在課餘時間，透過參加慈濟的志工活動，見苦知福，長養慈悲心，成為一個懂得付出奉獻的人。因為期待孩子像一顆種子，在大地、陽光、雨水的孕育下發芽成長，故命名



■ 第四屆新芽獎學金頒發典禮，於會後合影。攝影／水谷瑞芳

「新芽獎學金」。
祈願新芽處處

在日本分會與町田設計學院的共同努力下，二〇一七年四月展開第一批十三位學生的援助。孩子們在一年內參與八次以上的志工活動，志工則組成關懷小組，除了陪伴學生參加志工活動，也扮演傾聽與關懷的角色。孩子們從視個案、夜訪街友、熱食發放、掃街等活動中，體會到有比他們更困苦的人，邁向更積極的人生！

岩手縣大槌町的志工山崎充聽到新芽助學金分享，心疼當地有些孩子因為家庭經濟因素而放棄升學的機會，積極的希望也可以在當地推動。在大槌町平野町長及教育委員會的支持下，二〇一八年四月實現了慈濟在大槌町的新芽助學金。

二〇一七年秋天，關西志

工一行人來東京參加二〇二〇年精進營之後，特意留下來參加新芽助學金的頒發典禮後非常感動。中村省吾回到大阪之後，經過幾年的努力，拜訪了四家孤兒院，經過深入互動和了解，在二〇二〇年四月，第一波疫情發生時，新芽助學金如及時雨，開始幫助第一位孩子，圓滿升大學的夢。

二〇二〇年疫情期間，慈濟人送口罩、關懷機構的因緣，志工林真子開始與目黑區若葉寮孤兒院互動。機構孩子滿十八歲必須離開，二〇二一年慈濟首次提供兩位孩子新芽助學金，幫助他們升學。平日除了手機聯絡，志工們每兩個月與孩子們見一次面、關懷近況。

教育是百年樹人的志業，看到孩子們畢業後找到適合的工作，百忙中仍然惦記著慈濟，感恩之情，欣慰我們的愛有了延續的希望！

大型活動的緣起與回首

撰文／許麗香 攝影／日本分會提供

早期的日本分會設在三軒茶屋的一間公寓，只有十來位委員、慈誠，少少的人，卻很溫馨。每個月固定在第二星期日舉辦會員志工聯誼，接引人間菩薩。



■ 1 志工聯誼會，陳金發師兄（右）於三軒茶屋會所，分享國際賑災經驗。

■ 2 志工們前往長野縣於會員家舉辦茶會。

日本分會成立的第八年，我從臺灣受證委員後，來到日本分會，當時只有十來位委員、慈誠，少少的人，卻很溫暖。我們很清楚，沒有人就沒有力量，大家共同的目標，就是如何透過活動來膚慰苦難，接引人間菩薩。

會員志工聯誼月會

當時日本分會設在三軒茶屋宋篤志先生提供的公寓，每個月固定在第一星期日舉辦會員志工聯誼。活動開始先禮拜法華經序或是三十七助道品，之後是心得分享與手語教學，志工不忘準備可口的家鄉菜，溫暖大家的身心。偶爾會有來自台灣的資深志工分享加入慈濟的因緣，以及菩薩道上的點滴，這個時候整個空間大爆滿，擠在門口進不了，也是這樣的因緣，讓當時的分享人陳金發，在證嚴上人的首肯之下，積極幫忙找到現在的會所。

到了現在的會所，有足夠的空間，持續每個月的會員志工聯

誼會，每每接引很多的會眾參加。隨著會務成長與各項活動日益增加，聯誼月會也不斷地轉型，在二〇一六年開始改成主題式不定期的聯誼會。

上山下海南北奔波社區茶會

除了在會所舉辦的聯誼月會，早期最盛行的就是利用志工的家舉辦茶會，有時會租借社區的活動中心。從東京、山梨、長野、新潟、群馬，遠至關西地區，甚至坐飛機到北海道，每家的主人都是敞開大門歡迎慈濟人的到來，除了豐盛的當地特產，還有會員志工提供的家鄉美味，加上滿滿的法益分享，樣樣都讓人感動、回味無窮。

家庭茶會在慈濟會員的接引上，扮演非常重要的階段，隨著時代的轉換，各項活動集中在會所舉辦。雖然家庭茶會慢慢減少，然而大家無法忘記當時的溫馨與感動，目前社區茶會開始在志工的家復活了。

祈福感恩會

二〇〇〇年二月二十六日，為了感恩日本友人與會員對台灣一九九九年九二一大地震的護持，借用佛所護念會在品川的場地，舉辦首次的歲末祝福，除了代表上人感恩護持的社會大德，也傳遞福慧紅包的祝福。因為在日本都是過年後舉辦，所以取名為祈福感恩會。首次的活動，大家憑藉的就是感恩與接引菩薩的勇氣，在這個可以容納千人的會場，來了七百多位會眾，以日本分會當時的人力資源，戰戰兢兢，幸好有上人的慈悲與祝福，派了台灣資深志工十多人來協助完成這個超級任務。回想起來，真的很佩服當年的勇氣與衝勁，還好有當年跨出的第一步，啟動了後來無數無間斷的足跡。

參考本會歲末祝福，祈福感恩會內容也越來越多樣化。每年手語入經藏演繹志工在幾個月前就要開始準備，活動組絞盡腦汁的規劃，香積菩薩也是費盡心



思，還有全球大藏經的日文翻譯團隊，製作日本大藏經的人文真善美團隊等，志工全體總動員，滿心歡喜來迎接一年一度的盛事。因應參加的人數分中文場、日文場及委員、慈誠的内部場次。關西地區在二〇〇三年三月二十一日於豐中國際文化交流中心，首次舉辦祈福感恩會，東京地區動員十來位志工前往支援，之後每年如期舉辦，漸漸由當地志工自行承擔舉辦，直到新冠疫情方暫停。

浴佛

二〇〇三年五月八日，首次在日本分會舉辦浴佛典禮，當年正好令人恐慌的SARS疫情盛行，日本分會在浴佛同時呼籲人人要齋戒茹素，避免疫情蔓延。之後每年與本會同步，在五月的第二

星期日舉辦佛誕日、全球慈濟日與母親節三節合一的活動，隨著人數增加，也分日文場跟中文場。時隔十八年，新冠肺炎在全

球蔓延，日本分會在二〇二一年善用科技舉辦了線上浴佛，大家虔誠禮敬諸佛，還有透過慈善分享，紓解了大家因為疫情無法出門的苦悶。跟著司儀：「禮佛足，接花香，祝福吉祥。」的口令，大家浴佛洗淨內心的塵埃，回歸清淨的本性。

歡喜感恩七月吉祥月

二〇〇八年八月十七日首次在日本分會舉辦吉祥月活動，配合本會舉辦歡喜感恩七月吉祥的宗旨，志工用心規劃內容，除了供燈供花莊嚴的流程外，宣導農曆七月是吉祥月也是孝親月等觀念，並分享慈善的足跡。跟祈福感恩會與浴佛節，並稱是日本分會的年度三大活動。

義賣會與愛心園遊會

一九九三年十月二日日本分會首次參加僑界在東京中華學校舉辦的國慶日義賣。除了設攤

參加義賣，也由志工提供節目，參加慶祝活動，藉此跟僑界結好緣，並推廣素食。每年慈濟的素炒米粉、酸辣湯、蘿蔔糕等家鄉口味，是最受歡迎的攤位。

一九九九年九月二十四日，首次參加在井之頭公園舉辦的三鷹國際交流義賣活動，跟各國結好緣，所得捐助國際賑災，也曾受主辦單位邀請，由慈青同學以及志工展現慈濟的手語演繹。

有鑑於參加外界的義賣活動攤位受限，二〇〇六年六月十一日，由當時的活動幹事志工王美玲，規劃了首次在日本分會舉辦的愛心園遊會。從一樓到五樓，有人文與環保主題，最受歡迎的是十多個家鄉口味攤位，以及惜福愛物的跳蚤市場，連續舉辦多年，接引許多會員大德護持。

配合活動的功能組

活動企劃的靈魂是活動組，由活動組依照本會當年的主題，

規劃活動的內容，目的都是要對內凝聚大家的向心力，對外接引善心人士一起共襄盛舉，幫助社會苦難。除了活動組，還有總務組，協助處理活動所需的硬體器材，若是舉辦場地在外面的時候，更需要車輛的調度，搬運粗重的器材，在人力不足的時候，女人要當男人用，男人要當超人用。

尤其在3·11賑災的時候，總務組更是發揮極大的功能，張羅各項器材。才能讓賑災工作能順利進行。

民以食為天，除了總務組，還有香積組，在大型活動，往往動員十多人，其中有大餐廳的大

廚加入志工行列，除了溫飽志工的胃，各種拿手家鄉口味，也溫暖會眾的心。

活動進行前，還有生活組的志工菩薩，不忘前來清潔場地，讓會眾有舒適的空間靜心吸收法益，會後的環境清掃，更是少不了生活組的菩薩默默的付出。

隨著活動的需要，許多的志工菩薩加入活動企劃、總務、生活、香積等各項功能組，付出寶貴的時間心力愛心，進而受證為委員或是慈誠。

結語

所有活動的舉辦，不外乎是對內志工向心力的凝聚，對外人間菩薩的接引。三十年的歲月，隨著時間空間人與人之間的交會，碰出許多火花，火花有大，有小，有燦爛有羸弱，每個因緣都令人感恩與珍惜，一路走來，還是感恩再感恩。感動，是再出發的原動力；感恩，是另一次更有力道的凝聚。

- 1 2011年首次為街友在代代木公園浴佛。
攝影 / 慈涓
- 2 山梨志工於2013年舉辦「祈福感恩會」。
攝影 / 邱碧粧
- 3 2012年吉祥月活動，志工們演出話劇。
攝影 / 濟一
- 4 活動組依照各主題規畫活動內容。
攝影 / 李淑娟

環保與素食 愛地球行動

環境保護，簡稱環保，是慈濟四大志業八大腳印之一，在臺灣設有八千個以上的環保教育站跟資源回收中心，由臺灣出發的環保志業，至二〇一九年底，在全球十九個國家地區，共有超過一萬個環保點，超過十一萬位環保志工。

撰文 / 王秀寧



■ 1. 志工為早稻田大學師生製作「一週一膳素食便當」。攝影 / 慈涓

■ 2. 志工DIY用廢布變身擦地草履。攝影 / 慈涓

環境保護，簡稱環保，是慈濟四大志業八大腳印之一，在臺灣設有八千個以上的環保教育站跟資源回收中心，由臺灣出發的環保志業，至二〇一九年底，在全球十九個國家地區，共有超過一萬個環保點，超過十一萬位環保志工。

日本分會投入環保回收最多的是群馬的志工們，從二〇〇二年到二〇一二年間每月二次持續不間斷。後來日本的環保資源回收改由公部門主導，志工們改以掃街維持社區街道整潔之外，也宣導節能減碳，推廣素食，以及利用環保酵素減少廚餘，還有心靈的環保宣導。心靈環保著重在如何藉由佛法來清淨身心靈，透過讀書會、精進課程、各式活動，以及雙月刊來創造接觸佛法的機會。

環保教育 掃地掃心地

東京的志工二〇〇二年七月開始在分會附近大久保通掃

街，跟社區結好緣，希望帶動大家共同維護環境。之後，曾經帶動慈青同學到高尾山淨山，也一起到歌舞伎町附近掃街，滿地的菸蒂和空罐，希望能提醒年輕人，在未來的人生要避免這樣迷茫的夜晚生活。

志工王美玲從二〇一〇年開始嚐試推動環保酵素，以果皮和菜葉製成環保酵素，除了減少廚餘，也可以當清潔劑使用，以及增加庭園植物的養分，同時淨化下水道。

透過環保酵素跟日本素食推廣團體交流，二〇一〇年到二〇一四年參加日本素食料理協會在代代木公園所舉辦的年度素食展，也藉此機會介紹慈濟在全球的環保活動。

二〇〇九年至二〇一一年分會配合雙月刊「ECO專題」的內容，舉辦舊報紙製作購物袋，廢布變身擦地草履，改造牛奶盒成為和風置物盒等體驗課程，並且邀請新宿區役所環保科職員為大家上課，增進環保常識。

出攤推素 美味結好緣

因為疫情的影響，上人呼籲全球的慈濟人，一定要以茹素來面對病毒的感受，全球更積極總動員推素茹素。因為疫情，所有實體活動都改為線上進行，推素活動也雲端化，透過線上讀書會志工也分享拿手蔬食料理，讓長時間在家防疫的志工，可以輕鬆為家人準備美味料理。

每年雙十國慶，慈濟都會受邀到東京中華學校設攤義賣，也曾到志工子女就讀的國際學校，還有在鎌倉建長寺為3.11賑災舉辦的活動中擺攤義賣素食。在外的團體義賣的幾乎都是葷食，所以藉此因緣來介紹美味的蔬食。尤其讓大家印象深刻的臺灣傳統料理，素食炒米粉和素酸辣湯，美味絕不輸給葷食。

素食是有益身心的飲食，並且是愛地球最簡單的方法。日本分會將持續深耕推素，吸引更多加入茹素的行列！



■ 中華學校義賣，推動「111世界蔬醒日、環保愛地球、愛地球家『素』行動」。攝影 / 李月鳳

二〇一五年曾舉辦「大家來做手提包」體驗課程，以無用的布料縫製精美的手提包。除了延長物命外，縫製的過程也學習到靜心、耐心與用心。

料理教室 蔬食在社區

二〇一〇年志工河村吉美

響應上人素食救地球的理念，積極邀約望月春江與潘秀鳳於新大久保開辦「心素食儀料理教室」，二〇一二年新增高田馬場教室，二〇一四年至橫濱「木菜食教室」開課。幾年來物換星移，負責的人員有增有減，堅持的都是同樣的目標，一直到二〇二〇年因為新冠疫情的影響，料理教室的活動暫時停止。

二〇一三年及二〇一四年時，為鼓勵大家嘗試研發新的素食料理，曾舉辦「屆素食料理大賽」，氣氛非常熱烈，煮食和試食的人都十分歡喜。二〇一四年曾舉辦「心素食儀料理教室」四週年感恩茶會，年底舉辦素食忘年會，二〇一五年初舉辦農曆新春饗宴，望月春江絞盡腦汁設計食譜，是令人難忘的素食料理盛宴。

二〇一二年至二〇一六年雙月刊每月定期刊登「素食料理教室」食譜二〇一〇年改為「我的蔬食行動」單元，每期由南北合氣各分享一道素食料理食譜。

守護的力量 培訓續人才

志工活動的永續，要靠人才培育以及背後許多長期默默支持的力量。

撰文 / 許麗香·王秀寧



■ 培訓課程中慈濟人進退行儀演練。攝影 / 慈涓

培訓課程是慈濟為培訓志工成為慈濟委員與慈誠所規劃的課程。內容透過上人的開示、精舍師父或資深志工的分享，深入了解慈濟精神與理念，作為參與慈濟各項志業推動的資糧。精進課程原本是針對已受證的委員慈誠規劃的課程，因疫情緣故改為線上課程，目前開放給所有志工。

培訓在地化

臺灣的培訓制度必須按規定上課和參加志工活動，再經過評估之

後才能正式授證。早年的日本分會沒有這個制度，從二〇〇〇年才開始舉辦在地的培訓課程。

當時日本分會還在三軒茶屋會所，每個月的培訓課程需要到處商借場地，第一次的培訓課程在蒲田的地域中心舉辦，之後在現在會所附近的「PEARL 新宿」上課，持續到二〇〇一年十二月搬入會所，課程從不間斷。

早期課程的資源較少，由當時副執行長許麗香委託臺灣的委員協助錄大愛臺的影響及搜集其他資源，再寄到日本來，資深委員也要勇於承擔當講師。

為了方便同步翻譯，還將證嚴上人開示的「人間菩提」字幕抄下，譯成日文。二〇一五年和二〇一九年各有四位日本志工受證，上課時上午由志工同步翻譯，下午以日文進行。二〇二〇年五月份起，因為疫情關係，改為線上課程，全程由已受證委員慈誠以日文進行。

傳承護法人

培訓初期，關西地區來上課的十來位志工就寄住在許麗香家，群馬跟山梨地區的志工則是當天來回。隨著當地人數增加，也開始到群馬、大阪與神戶舉辦培訓課程。

早期關西地區除了在神戶借用場地，持續最長久的是在大阪豐中地域中心，由東京負責培訓的幹部每兩個月前往，為關西地區的志工安排課程。一直到二〇一〇年有了大阪聯絡點之後，就固定在聯絡點舉辦。

不論培訓課程或大小活動的背後，總是有職工協助處理財務管理外，也有志工長期協助會計，整理帳務。另外針對個別活動也有志工協助活動所需的費用與核銷。

此外，有人事志工長期配合本會的系統，協助整理志工人資料的建檔與保管，更新組織架構的變動等等。點滴付出，人人都是法的守護者！

社區推廣教育

生涯學習不間斷

常云：「活到老，學到老」，但面對快速變化的時代，唯有透過學習，方能應對快速變遷的社會，所以「生涯學習」，成為現代社會中不可或缺的功課。

撰文 / 陳雅琴

慈濟日本分會透過社區教育活動（簡稱社教）推動生涯學習起源很早，多年來有許多課程。早期除了日文會話班、氣功班，還有由志工許麗香及張好

所帶動的「靜思茶道體驗班」，廣受好評。此外，例如井田吾心帶領的「二胡班」；結合愛好歌唱者成立「合唱團」，王美玲邀請專業老師來授課；巧手多樣才華的劉月英開設「中國結班」，

及去年疫情中開設的短期電腦班「如何使用 ZOOM」等，隨著時代的變化，也不斷的調整方向。

二〇二〇年九月開始，正式推出「生涯學習講座」課程，目前有成人中國語、抄經班、草月

流花道班、靜思花道班及手藝教室。

最早的成人中國語班於二〇〇二年四月成立，已近二十年了，週日上課，學生有上班族、退休族、家庭主婦，最近還有國中同學參加。語言學習，無論在那一個階段、在那個年齡，都不會太晚的。

二〇一七年八月成立的抄經班，窗口志工林秋里表示，在這紛紛擾擾的日常生活中難得有一段清淨時刻。在這匆匆忙忙的現代社會，也為了訓練耐心定力，抄經是很好的選擇。

花道課程最早源自二〇〇五年鄒淑英開設真善美花道班，時間長達五年，課程中讓學員體



■ 靜思花道上課一景。攝影 / 慈涓

會「一花一世界，一葉一如來」的靜與美。除了花道以外，更分享慈濟四大八法，當年是學員的藤本裕子現在已接棒成為老師。

草月流花道班的指導老師是杉山麗杏，教授不受任何花材都可以自由創作型之草月流，一個月上課兩次。

手藝教室是希望藉由手作，發現自我潛力及無限的創意，而且每個手作品，有手作的溫暖，更是唯一。除了上述講座外，新課程也在企畫中，更希望隨著疫情的減緩，能邀約到不同領域專業人士及老師共同參與。

前蘇聯作家高爾基：「如果不想在世界上虛度一生，那就要學習一輩子」。經由學習，除了發掘自我的潛在能力外，還可學會正向思考，及優雅沉穩的儀態，更可創造無限可能，不停止的學習，終身都受用，更是常保健康及年輕的妙方！

從流通處到靜思小築

以靜思精舍為起點，靜思小築承載著傳遞證嚴上人淨化人心的精神使命，目標在於「淨化人心」，和成為人間菩薩大招生心靈充電站。

撰文／河田瑞穗・黃韻璇



■ 早期流通處時常舉辦讀書會，志工林素子（左3）時常分享做慈濟點滴。攝影／慈涓

日本分會於二〇〇一年十二月搬到新大久保現址後，即於一樓成立靜思文物流通處（即靜思小築的前身），以跟全球同步調的氛圍裝修。剛搬進來時，志工非常興奮地規畫，張羅了茶具，還有志工高銓德捐贈的桌椅。志工林素子分享當時的流通處氣氛非常溫馨，不僅方便讓志工會員們買到靜思文物，志工們都把流通處當成自己的家，需要人時就自動補位，泡靜思茶及準備茶點接待想來慈濟了解的民眾們，是菩薩大招生的第一站！

二〇一六年 靜思小築正式成立

廣靜思書籍。」
心靈講座用生命感動生命

靜思小築成立之後，常舉行心靈講座，邀請各界人品典範來分享生命的體驗與智慧，有中西醫師的保健知識分享，日本分會督導陳金發的人生故事，志工李阿利的靜思茶道人文等，每個人都以誠以情接引更多人間菩薩同耕福田。河田印象最深的是台北萬華區志工楊茹云的心靈講座。由楊茹云的女兒黃韻璇配合鋼琴，讓小築有茶香、琴聲、歌聲、笑聲，加上志工們不遺餘力推廣新的小築產品及上人的著作值得學習。

此外，靜思小築團隊每次對外活動時都不遺餘力推廣靜思產品，像是煮好喝的小葉紅茶或牛蒡茶，吸引來客駐足傾聽志工們介紹慈濟。志工陳麗芬跟吳桂英，就常常用小築產品研發小點或菜色，有活動就會做好跟大家分享讓全家大小吃得安心的「淨斯」食品。想要有健康的身體就是要多如素！

證嚴上人說：「有心就有福，有願就有力。」難行能行菩薩道，期許我們都能成為一位法度人間傳大愛的小築志工，合和互協接引更多的人間菩薩進入慈濟的家庭。讓每位踏入小築的人都能感受到溫馨氣氛，透過有形的書籍來推展靜思人文，使大家深入了解並吸收其中無形的妙法，以「淨化人心」為終極目標。

小志工奉茶 靜思產品推廣

除了心靈講座之外，團隊曾舉辦靜思小志工的課程，包含手語演繹、奉茶禮儀、靜思鐘鼓等，希望也影響家長能一起多了

二〇一二年十一月，隨著會務的發展與會眾的增加，為了讓活動空間有效運用，分會進行了內部的整修，於二〇一三年年初完工。雖然廚房配置問題，靜思文物流通處不能跟全球的靜思書軒一樣對外販賣食物及飲品，但是仍能提供一個空間，讓每一位來到日本分會的志工們感受慈濟的溫暖及美好。

個人的無私奉獻，為日本分會寫下了美好的大藏經。
小築團隊的精進尋根之旅

非常感恩上人的慈悲，也感恩台灣志工高銓德的設計與監工團隊，包含捐贈桌椅組，還有台灣幾位志工捐贈自台灣運來的系統櫃等器材。在施工過程期間，有些志工幾乎都住在分會幫忙，一聽說有二十呎貨櫃的器材要搬運，上班上學的志工們，在下班下課後也前來支援，還有用心為施工人員準備點心的志工們，點點滴滴造就了小築的今天。

二〇一三年六月十七至十九日是團隊第一次回花蓮精舍參加全國靜思書軒店長的尋根之旅，日本分會共有六位志工參加，目的是學習如何讓小築有靜思精舍的溫暖，如何傳上人的法到訪客的心中。目前是小築合心關懷的志工河田瑞穗，當年就是因為上人的著作經典而進入慈濟的大家庭，後來更是發願要把靜思人文推廣給更多的人。

二〇一六年九月一日，靜思小築成為正式設立的收益事業，可以提供的商品和服務範圍更廣，這兒是大家以法相會，以愛心相結合的法親相聚道場，每

河田說：「很感恩那一次尋根之旅，有常住師父、講師群和全台書軒店長們的分享，讓種子志工們深切的體悟到要成為一位盡職的小築志工，一定要法入心、法入行，因小築志工的一切言行舉止都代表著慈濟在大家心目中的形象。此外小築志工必須認識靜思人文的各類出版品，進而自我先精進閱讀，以及學習如何推



■ 1 慈濟三義茶園負責人陳忠厚師兄分享靜思茶。攝影／慈涓
■ 2 靜思小築窗口志工河田瑞穗（右）經常舉辦心靈講座。攝影／慈涓



■ 3 資深慈濟志工楊茹芸師姊（右3），於「周三讀書會」上分享她的慈濟因緣。攝影／慈涓



1 慈青前往山梨縣做耕作體驗。攝影 / 慈涓



2 慈青掃街活動。攝影 / 林真子



3



4

3 慈青一同參與街友關懷。攝影 / 陳文絲

4 慈青一同參與第五梯東日本女川町賑災發放。
攝影 / 陳婉璇

年輕的力量 慈青的回首與展望

撰文 / 張秀民 · 鍾佳玲 · 謝玉潔

日本慈青（慈濟青年）的年齡層分布很廣，有就讀日本語學校的學生、大學生、大學生、也有打工簽證的社會人士，大家來到日本後因為不同的因緣而接觸慈濟，而只要是年輕人，就都稱做「慈青」。

早從日本分會一九九一年成立時，就有留學生出現，不過當時還沒有「慈青」這個名稱，他們主動前來協助，從草擬章程、幫忙月刊打字、編排、撰寫文稿到策劃活動等，都有年輕學子的身影。在不影響功課之下，他們經常跟著長輩去做訪視關懷，參加東京中華學校義賣，群馬三鷹國際交流義賣時，除了使出渾身解數募愛心外，也上台演繹手語。

回首日本慈青

隨著越來越多留學生的參與，在第一任執行長謝富美的鼓勵之下，一九九六年六月十一日正式成立「日本慈濟大專青年聯誼會」，簡稱「日本慈青」。為了聯誼並接引新夥伴而策劃戶外活動、創意團康營等等，同時也組團回花蓮參加營隊學習。

二〇〇一年日本分會搬到現會所的初期，九樓曾經是女生宿舍，提供給慈誠委員的兒女或

是慈青居住，來自不同國家的慈濟人子女和慈青彼此互相認識，入住期間大多數的人也參與了慈青活動。除了配合參加分會的活動之外，自二〇〇〇年開始，日本慈青開始規劃定期的志工活動。二〇〇七年開始，每月第二個星期日有掃街活動，也曾舉辦戶外迎新及三日營。

每個月的掃街活動，大家在分會集合後從歌舞伎町掃到職安通後回分會。「おはようございませう（早安）」是我們的默契，除了和路人道早安外，也提醒互相讓路。掃街完回分會，整理垃圾、清洗用過的用具和志工背心後，分會的師姑師伯總是貼心的準備早餐讓年輕人們享用，掃街活動一直持續到3・11震災那年左右。

每年日本慈青會在新宿御苑舉辦戶外迎新，接引新朋友加入的同時，一同在新宿御苑賞櫻。每年的母親節感恩活動，是慈青感恩長輩們對慈青照顧的時刻。除此之外，也著手統籌三日營，

讓新進來的慈青更加了解慈濟的靜態課程外，也透過團康增進彼此的團結力，或到戶外做志工的動態活動等，利用三天的時間增加慈青的向心力。日本分會對我們來說，像是下課後的安親班，讓留學在外的學子們在這裡交到許多朋友，也得到了滿滿的愛，如同回到台灣家鄉一樣的溫暖。

走入災區關懷

二〇一一年三月十一日東日本大震災，帶來無比的震驚。

地震過後，東北災情慘重，救援刻不容緩，當時慈青們沒有畏懼，主動前往日本分會，希望可以盡自己的一點力量協助救災。

一群年輕人幾乎天天以分會為家，從初期的蒐集資訊、製作相關簡報外，到中期的見舞金發放，年輕人發揮了機動性，在發放的過程中扮演著重要的角色。整個過程害怕嗎？當然害怕，但是沒有人因此退縮。

累嗎？看年輕人在前往東北賑災的路上睡得東倒西歪，就知道不可能不累，但是整個活動是幸福的，除了可以在幫助他人中得到喜悅外，也與許多人結下一份好緣。在繁忙的賑災活動中依舊吵雜的慈青們，更培養出一份難能可貴的默契。

愛的延續不斷

二〇一一年底，帶著參與賑災的感想，大陣仗的回到心靈的故鄉花蓮參與海外慈青幹訓營，與他國的慈青進行交流，像

是同學會般，大家都很高興。結束了見舞金發放後，仍多次隨日本分會的脚步，回到東北進行關懷的活動。

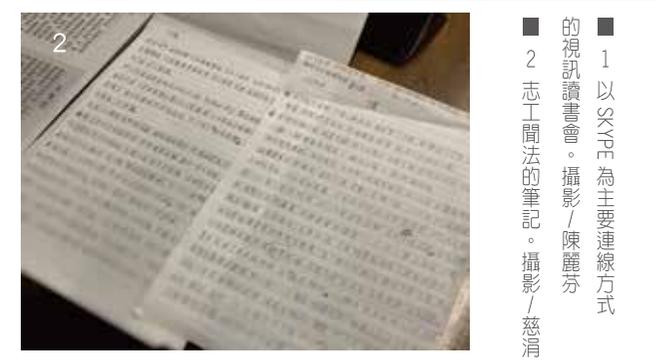
日本慈青們也學習深入當地，藉由在東京大學的學園祭擺攤，與同學們分享東北賑災的點滴；也曾前往山梨縣協助植苗、插秧收稻多次，在當地的老人養護中心與老人家歡喜歌舞；也曾往寒冬前往東北深山協助剷雪等。但我們深信，一點一滴都是種下一顆善的種子，我們只需靜待發芽結實的那天。

日本慈青大部分都是留學生，三、四年一個週期，來來去去的，雖然最終扎根在日本的不多，但每個當下都是一個美好的因緣。每每回憶起那個當下，大家都會心一笑。在日本的慈青生活，很充實、很幸福也很感恩。近年，欣見志工子女或留學後在日本就職的年輕力量，持續走入大愛的家庭，利用假日在活動時承擔音控、翻譯等工作。願愛不息，願愛無量！

視訊讀書會 緣起與展望

四年前當許多全球慈濟人都在互問，你今天薰（佛）法了沒？日本慈濟人想到，除了每天薰法香外，如何聞法不忘，而且讓更多人薰法。於是，從二〇一七年三月開始，推動了線上視訊讀書會（以下簡稱視訊讀書會）以及社區讀書會，連同原有的實體讀書會三種並行。

撰文／陳麗芬



1 以 Zoom 為主要連線方式的視訊讀書會。攝影／陳麗芬
2 志工簡法的筆記。攝影／慈涓

不論是小酌品式的品書，還是忙碌社會下快速式的牛飲，都能強心補慧命。日本分會最先是一〇〇二年，由許麗香開始以《無量義經》等證嚴法師開示的佛典系列，以及《衲履足跡》為共修的主題，之後結合品茶的「書香茶香讀書會」，內容為以《無量義經》或《靜思法髓妙蓮華·序品》重覆誦讀，多年來吸引了許多的志工。

當年十一月，南和氣隨即成立針對大愛廣播播出影音複習的線上讀書會，每星期五晚上進行，針對一星期來大愛廣播出的靜思晨語（當時為《法師品》）做一複習，從一開始十多人參加，最多時快四十人參加。導讀人在 Zoom 上分享外，LINE 上有一個群組同時一起聆聽。

當時由志工陳麗芬負責接線，在家裡除了從電腦上播放 Zoom 外，也借家人的手機接 LINE 轉播。在二〇一〇年七月以後，為了提升日本分會視訊品質，在分會舉辦三次線上 Zoom 教學，由志工黃韻璇及潘慈芬二位教學，志工反應熱烈，團隊還多次提供到家教學服務。終於，不論老少，大家都能無障礙使用 Zoom 軟體。在 Zoom 中每個人都可看到主講者分享的畫面，視訊讀書會邁向新的里程碑。

空中傳法薰法香

自四年前開始，利用 Skype 為主要連線方式，於同年五月底開始了每週一次的視訊讀書會。為了聞法、行法及傳法，導讀人自己要先讀。因此，合心組帶領在每星期四晚上將各集以重點式分享十分鐘，複習一星期來上人每日升座的開示，持續至今。

二〇一七年六月全球幹部回臺參加四合一精進營，日本慈濟人上臺分享視訊讀書會的心得，每日薰法是每位慈濟人的日行功課，但聽完再複習，日本分會率先開始並線上進行。

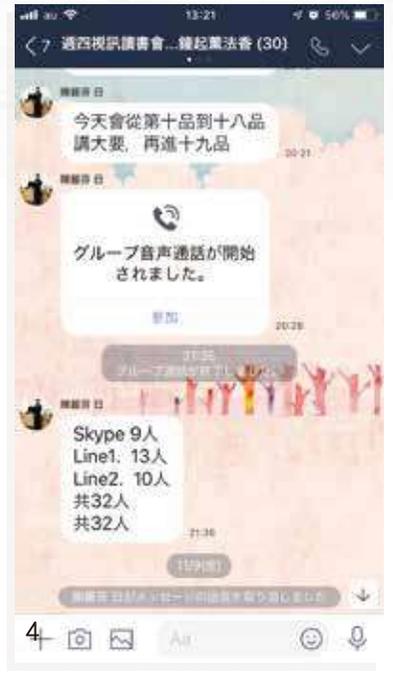
疫情下品書安人心

許多志工從不認識《法華經》，到佛法是我的好朋友；開始覺得承擔導讀像月老，到現在導讀如飲水般的平常，這當中的曲折，不得不說，讀書永遠不嫌遲。從剛開始的華路藍縷到今日，更讓人相信一切因堅持而看到希望，而非看到希望才堅持。

去年開始疫情擴散，如同經歷《法華經》第七品化城喻一般，上人像大通智勝佛宣說佛法永常外，常住師父如同經中的十六王子般，開始隨處宣說上人的《靜思法髓妙蓮華》。全球慈濟人的品書會，如同菩薩從地涌出般，



3



3 書軒值班志工也保握上線聞法的機會。攝影／陳文絲
2 每星期四晚上將上人一星期的開示重點以十分鐘分享的讀書會。攝影／慈涓

去年七月開始，祈禱後新增了品書會，大家法喜充滿。週一到五的晚上，每天以彼此能聽懂的方式分享佛法，開心且法喜。有志工說，以前她很少跟大家互動，有這個平臺後，感覺跟大家的距離拉近了；對於沒有佛法底子的人，這樣的平臺讓大家可以有信心，開始敢分享了，也因此慢慢吸收佛法。

此外，南和氣品書會也是從去年疫情開始後，因活動大部分改在線上，於是遵從上人慈示的大哉教育：每天大懺悔、祈禱、茹素、勸素，連續一年多的每

日週二下午線上活動，除了志工還有會員也常參加。在這樣不安的大環境下，能有安定人心的活動，大家都歡喜。

為了讓各社區更有參與機會，星期一下午持續由南和氣規劃，邀約社區志工會眾參加，提昇協力組與會員的情感交流，與對佛法的深入了解。現在各社區有十多個品書會遍地開花，法流入每個人的心中，每個人都是說法者、傳法者、行法者！

關西地區，也是自去年八月開始啟動第一次的週五線上品書會，其後又增加了週三班與第四週六複習班。導讀時，除了分享佛法，亦分享自己生活中、工作上遇到的煩惱，以佛法來觀照省思。一年多下來，人人感受到彼此心靈的成長。

從不敢、不擅長分享，到現在許多人能侃侃而談分享心得。如上人說的，不懂佛法沒關係，每天聽一點，累積到八識田裡，就像龜兔賽跑，持之以恆不懈怠是最重要的。



1 訪問と思いやり

訪問ボランティア 大愛を広げる

訳 / 吳兪輝 文 / 陳靜慧

生命にとって、明日が先に来るか無常が先に来るか不明である。人生の老いや死は避けられず、突発的に発生しては恐怖や衝撃を与えてくる。慈濟は慈善団体として始まり、訪問ボランティア達から届いた様々な苦難の声を一つひとつ救いあげてここまでやってきた。

病人への付添い

慈濟日本分會が設立して間もない一九九四年、四歳のカイカイちゃんの夢を手伝った。カイカイちゃんは血液癌の骨髄移植に失敗し、最後の思い出として日本のデイズニールランドへ遊びにやってきた。五日間の旅に、ボランティア達が付き添った。

二〇〇六年、台北から「息子を手助けしてほしい」という電話が届いた。若い陳寶倫さんが高度な治療を受ける為に来日するので、病院とのやり取りを助けて欲しいという依頼であった。来日してから二ヶ月間の治療の間、毎週ボランティアがお見舞いに行つた事で、安心出来た陳さんは、無事に治療を終わって帰国した。その後、恩を感じた両親は人を助けたいという思いから揃って慈濟に参加した。

病人の付添いは、国籍を問わずなかつた。二〇〇九年、日本国籍の加賀さんから依頼が入つ

た。病気のせいで長期間寝たきりとなっている加賀さんの部屋の畳は、腐って異臭を放つていた。慈濟は区役所など関係部署と調整し、三十名のボランティア達を派遣して、畳の交換だけではなく、住居をできる限りバリアフリー化した。

付添いは短い時で数日、時には数ヶ月に亘る事もあった。二〇一四年、三歳の龍雪ちゃんは原因不明の脳炎後遺症になり、リハビリが必要になった。慈濟は長期間に渡り、連携して翻訳を支援した。二〇一五年、七歳の可嘉ちゃんは中国から来日したが、治療に数ヶ月かかると病院に伝えられた為、慈濟が両親と一緒に住宅を探したり、翻訳を行つたり、病院でも大愛弁当を送つたりして付き添った。

病院に入院している患者自身が一番精神も身体もともに辛い。訪問ボランティアである林真子は、休日や仕事の合間に入院中で同伴者のいない患者や家



2 ■ 1 加賀さんのケアを行う慈濟ボランティア。
写真 / 朱月嬌
■ 2 大阪慈濟ボランティアがケアケースで訪問する。
写真 / 日本分會
■ 3 旅行しにきた方が急病で手術になり翻訳の支援する慈濟ボランティア。写真 / 高橋鳳英

族に付添い、必要な手助けを行っていた。サポートは翻訳から申請書作成、リハビリなど多岐にわたった。

年配者への思いやり

日本分會もよくホームレスからの SOS を受け取る。旧日本軍に所属していた李仙賜さんは、戦後、九州で身分も無く一人で孤独に暮らしていた。一九九六年にその友人から依頼を受け、慈濟と台湾政府の戸籍チー

ムが共同で調査を行い、五十年以上連絡が途切れた李さんの弟を見つけ出した。台湾ではすでに李さんは亡くなったと思われていた為、戸籍の作り直し等が必要になったが、家族が日本で半世紀ぶりに再開を果たしたことは感動的だった。

二〇一〇年、慈濟は台湾の留学生から助けを求める手紙を受け取った。留学生の元恩師である尾村文朗氏が孤独なひとり暮らしで衰弱もしていて、心配の旨だった。尾村氏は積極的に日本語学校に立ち寄り留学生達の面倒を見ていた。時には無料で講義をしたり、自宅に招いて食事を振る舞つたりもしていた。慈濟は尾村氏を定期的に訪問し一緒に食事したり、部屋の片付けを手伝つたりした。この訪問は、尾村氏が旅立った二〇一三年の最後の日まで続いた。

一月日が経つと、故郷が何処か分からなくなることがある。二〇一八年、六〇歳を過ぎた柳耀

文氏は大きなリュックサックを背負い慈濟の門を叩いた。願いは台湾への帰国だった。若い時に日本へ留学、しかしお金のため違法労働により学校を辞め、パスポートは更新出来ずにいた失業により貯金で生活していたがそれも無くなりホームレスとなった。そのとき病気で倒れ、入院そして警察のお世話になっていた。違法滞在が二十数年を超えていたが、慈濟に SOS を出してから三十二日後、柳氏は身分証明書が再発行され、無事に台湾に帰国した。彼は今では台湾で新しい仕事、そして生活をしている。

逝去時の支援

世界中に散らばっている慈濟は、現地における護身札となり、緊急時に支援を行っている。一九九五年、神戸に留学していた安安さんが乳癌で逝去した。台湾にいる家族から日本分會に連



■ 1 新潟中越沖地震にて炊き出し支援を行うボランティア。写真 / 林真子

訳 / 朱家生 文 / 許麗香

證嚴上人は：「私たちは社会で受けた恩恵を、今度は自分から世の中に活かして貢献できるように」と、常に海外の弟子達に伝えています。

大規模救難救助 災害あれば東西南北 どこからでも馳せ参じる

福祉制度がしっかりしている日本では、困っている人をあまり目にしません。大災害に遭遇したときには、助けを必要とする人々が増加します。そんな時こそ、お互いに思いやることが重要です。日本分會による大規模な災害支援は、一九九五年四月に名古屋で墜落した飛行機の乗客の家族へのケアが始まりました。

新潟水害清掃支援と震災支援

二〇〇四年七月新潟県三条市の洪水時には、東京と群馬のボランティアが合流し、三条市の人々の家屋の片付けの手伝いに行きました。同じユニフォームを纏ったボランティアたちは、ここでも見事なチームワークを発揮しました。

同年十月の新潟中越地方で起こった地震の際には、地震発生から三日後、一五〇セットの寝袋の他、水や食料を持ち、通常

3・11東日本大震災援助

また、二〇〇七年七月に新潟県柏崎地震が発生した際には、パニックに陥った人々の心を癒す為に、ボランティアは早急に温かい食べ物を提供しました。

二〇〇一年三月十一日の東日本大震災は、大津波や原子力発電所爆発などの大災害を引き起こしました。地震発生から五日後、ボランティア達は茨城県大洗町へ行き温かい食事を提供しました。その後、台湾の救援物資も日本に到着し、三月二十四〜二十七日には岩手県、宮城県、の被災地に物資を配布に行きました。

未曾有の災害が起きた後の東北では、各地域の役所で市民の



■ 国際 SOS 救急隊の要請によりケース通訳する。写真 / 林真子



■ 慈濟ボランティアが助念を行う。写真 / 日本分會

絡があり、慈濟ボランティア達は家族が到着するまでの二日間、安安さんの友人達と霊安室で見守った。同年、三〇歳すぎの台湾留學生が来日してから罹ったエイズにより危篤状態に陥った。台湾の家族に迷惑を掛けたくないという本人の意思により、慈濟が最期の日まで傍で支援を行った。

観光シーズンには来日旅行者が遭遇する事件も多い。慈濟では自動車事故、転倒事故、自殺、殺人、脳出血、心筋梗塞、腹膜炎、動脈解離など、数え切れない事由から支援要請を受けてきた。無常な時にはその年齢を問わず、ボランティア達がその人の人生の終わりまで付き添い、その家族にも支援を行ってきた。二〇一〇年、東京の病院から慈濟に電話があった。脳腫瘍に罹った子供の何ちゃん、緊急手術を行う必要があり、その通訳の依頼だった。数回の手術の後、高熱を出した何ちゃんは帰らぬ

子となってしまった。家族に付き添い最期まで見届けた。二〇一〇年四月のJCOナ禍、何ちゃんの父親から日本の慈濟に千枚のマスクが届けられた。台湾でも慈濟のボランティアとして活躍しているとの事だった。

精神的付き添い

愛の付き添いには皆の力が必要だ。二〇〇六年黄さんは緊急分娩が必要になり、慈濟に電話を掛けた。訪問ボランティアの林素子は電話口で黄さんにまずは救急車を呼び、病院に向かうよう指示をした。すぐさま他のボランティア達と三つのチームに分かれ、黄さんの彼氏へ連絡、一歳の長男の面倒、台湾へ帰国する手続きを行った。黄さんが退院するまで長男の面倒を見、退院後は自宅の片付けや赤ちゃんの沐浴等、家族三人が無事に台湾へ帰国するまで支援した。

二〇〇七年、古谷珊伊さんは

脳出血を発症、応急処置後に意識は回復した。三ヶ月間のリハビリの間は訪問ボランティアの呂瑩瑩が古谷さんの代わりに家族の面倒を見た。呂瑩瑩は珊伊さんの住まいの近くに住んでいて息もあつた。珊伊さんがリハビリ後まもなく、松葉杖をつきながら慈濟のボランティアに加入した。

二〇〇八年、台湾人シェフの林さんは仕事で、脳出血で倒れた。奥様の劉さんは日本語が分からず、慈濟に助けを求めた。それを受けた慈濟は通訳、リハビリの支援及び社会補助申請などを手伝った。申金さんは慈濟の支援に感動しここ数年は度々分會に来てはボランティアとしてほかの方を助けています。

「苦しんでいる人が来られないならば、福を持っていく人が行けば良い」助けを求める声があれば日本慈濟はそれに対して答えるまでである。三〇年間ずっとそうだった。





丸森町に千枚のエコ毛布を支援。写真/ 慈涓



倉敷市立二万小学校で温かい食事を提供。写真/ 慈涓



2



1 熊本地震現地への炊き出し支援。写真/ 慈涓

2 鬼怒川氾濫により被災にあった住民の家を清掃。写真/ 劉桂梅

3 東日本大震災、家屋被害に見舞金の支援を。写真/ 日本分会



3

問題を解決するのに疲弊し、外部の援助団体にまで対応する余裕はなく、慈済ボランティアが援助申し出のポイントを取るのも難しい状況にありました。常に人々への配慮と困っている者への救済に向かうという厳上人の教えから、慈済ボランティアは信念を曲げる事なく、コミュニケーションを図るのが難しい状況の中でも、どうにか見舞金の支給ができました。

六月九日から十二日まで、岩手県釜石市、陸前高田市で初回見舞金が支給されました。その後も合計十回、およそ二十六の市町村で支給され、金額は約五十億円余りで、九万六千戸余りが受け取りました。八月に釜石市と協約を結び、釜石市の中学校の給食費とスクールバスの燃料費を支援しました。

十年間ボランティアのあゆみは止まらず、毎年祈福感謝会や茶会を開催、人々を訪ね、新芽奨学金制度を開催しました。私

たちは一つ一つのご縁を大切に、築き上げてきた愛の絆が絶えないよう努めています。

悠々たる鬼怒川が荒狂つとき
温かな慈済の愛が届けられた

二〇一五年九月、台風十八号の影響で、栃木県日光市の鬼怒川が氾濫し、多くの堤防が決壊しました。ボランティア達は常総市の被害調査を行い災害救済活動を進めました。被災にあつた住民の家を清掃し、避難所を訪問し、常総市役所の清掃作業も支援しました。災害物資の分類整理も行い、市役所職員に四〇〇個のベジタリアン弁当も即時提供しました。また被災した現地の台湾人には、證嚴上人は特別に慰問金と調理用具と毛布を送りました。

熊本地震後のケアに
日本慈済人の緊急動員

丸森町に一千枚の毛布を送り、十九日には慈誠師兄が長野へ被害調査に赴き、翌二十日はボランティアが二チームに分かれて、埼玉県川越市の清掃に協力しました。十一月八日には、長野県豊野町に二五〇人分の温かい食事と熱い静思茶を提供しました。

人々が苦しんでいる時には、私たちも同じ気持ちで共有し、必要な物資を提供します。

この三十年間を振り返ってみると、創立当初は、数人で行っていた活動に徐々に仲間が増え日本分会となりました。大規模な災害活動では、子供たちと大人が共に協力し歴史のページを作ってきました。今後は社会貢献の出来る人間が更に増え、様々な人に、より多くの力を与え、困っている人々の頼りとなった、空腹な人々には熱いスープを分け与え、ひと筋の希望の光を灯すことを祈っております。

二〇一六年四月、九州の熊本県でマグニチュード7の地震が発生しました。ボランティアは「人々が苦しんでいる時には、私たちも同じ気持ちで共有する」という信念のもと、四月二十二日から五月十四日まで熊本県大津町で毎日温かい食事を提供しました。

慈済人は毎日料理の種類を変えながら、心を込めた野菜スープや八宝菜で野菜不足を補い、台湾の静思茶も提供しました。また、避難した住民達と一緒に食事の準備をしながら様々な感動や喜びを共有しました。地震で学校が休校になった学生は、毎日の給食の献立作りに協力しながらボランティアと親しくなり、その関係性は今も続いています。

西日本豪雨で被災者救済

二〇一八年七月、西日本で豪雨が大きな被害を引き起こし、

関西慈済人は岡山県倉敷市真備町にて被害調査をしました。七月十二日から九日間連続で、倉敷市立二万小学校で温かい食事を提供しました。東京と大阪の慈済人が合流し、温かい食べ物準備しながら、その合間に届いた物資の仕分けや、地域の掃除などもしていました。

被災した住民が家を掃除する為に使用する発電機の提供のほか、小中学校の学生が校内で食事をする時に着用する割烹着もプレゼントしました。その後も、関西ボランティアは常に地元ボランティア団体と連絡を取り合い、まるで家族のような関係性を大切にしています。

台風19号による被害

台風19号では、日本全国七つの県で七十一本もの河川が氾濫し、日本分会は短期、中期、長期のそれぞれの支援にそなえました。まず十月十八日に宮城県

刑務所のケア

愛を伝えよう 受刑者の心のケアを



1



2



3

訳 / 岩村益典 文 / 黃韻璇 陳靜慧

刑務所は一般的に、社会から敬遠され、歓迎されない場所と認識されています。法を犯した囚人たちが、罪を償い、孤立した生活を送らなければならない場所なのです。

日本支部が発足して四年目の一九九五年、慈善の足跡は刑務所の中へ入っていきましました。法広師父（当時ボランティアの黄素梅）は、カトリック教会の死刑囚への配慮から、マレーシア人の阿黄（仮名）を訪ね、慈濟の『静思語』『慈濟道侶』や月刊誌を渡しました。その翌年、阿黄さんの母親がボランティアに付き添われて日本の裁判所を訪れた。彼女は、ボランティアに「息子はいいい子で、家事を手伝ってくれました…」と話しました。そう。受刑者には、ひとりひとりの物語があるのです。

慈濟の刊行物が 受刑者の心の支えに

一九九七年、慈濟は、東京拘置所に収監されている小博さん（仮名）から、仏教や人生哲学について語る手紙を受け取りました。そして、二通目の手紙では、今までどんな人生を歩ん

できたかを綴りました。ボランティアたちは、彼にもっと仏教の本を読むように勧めようと、慈濟の出版物や下着を贈りました。

一九九八年、中国人の囚人、小宋さん（仮名）は、拘置所から慈濟へ手紙を書きました。日本で働くために借金して不法入国した彼は、数日で逮捕されてしまいました。言葉も通じず、家族にも会えず、莫大な借金も抱えています。毎晩、睡眠薬に頼って眠る毎日が続きました。でも、ボランティアの世話で彼の心は落ち着き、翌年中国に帰りました。

高橋鳳英や林淑芬は、感謝と励ましの手紙を書き続けました。そして、二〇一三年の初めに、刑務所での善行が評価されて仮釈放されたとき、余瓊珠と林淑芬は、彼の世話して、その後台湾ボランティアが引き続きケアするように手配しました。

異国で犯罪を犯した人へのケアは色々です。通訳をしてくれる人を探して家族と連絡を取りたいという人もいれば、家族と連絡が取れない人もいるし、便箋や切手などの消耗品が必要など、助けを求めて手紙を書く人もいます。また、中国人受刑者だけではなく、日本人の受刑者からも助けを求め手紙が届いています。

暗きを照らす灯いとなる

ボランティアは、手紙を通して、受刑者が自分自身を肯

定できるように寄り添います。ある二十代の受刑者は、刑務所の中で英語、日本語、韓国語などの言語を学んでいます。ボランティアたちは、受刑者が困難な状況の中で前向きなエネルギーを得られるようにと、参考書を探してあげました。

また、ある受刑者は、月刊誌の情報を見て、常総市の洪水被害者の助けになればと、横浜の外務省事務所を通じて、義援金と無限の愛を送ってくれました。

また、別の受刑者である秋さん（仮名）は、ボランティアから送られてきた中文の書籍や静思語、隔月刊の雑誌などを読むと、家に帰り、ほっとしている気持ちになるので、宝物のように思っているそうです。チャリティー粽販売のニュースを見た彼女は、刑務

- 1 仮り出所中の方が長年間、月刊誌の提供に対してお礼を言いに来会。写真 / 慈涓
- 2 会員の西本弘忠さんは入国管理国の面会に行ってくれた。写真 / 慈涓
- 3 慈濟隔月刊誌の鬼怒川の水害の報道を見た受刑者からの寄付。写真 / 慈涓



■ 第一回代々木公園の炊き出しに、街友にエコ毛布の配布を行います。写真 / 王秀寧

街友への支援 衆生が心安らかに過ごせるため 寄り添う温もり

訳 / 李曉萍 整理 / 陳詩萍

慈濟基金會は街友への支援は二〇二一年現在、代々木公園での炊き出し活動、夜間の街友への訪問、冬の物資配布に加えて、関西でも慈濟ボランティア達の愛の活動が行われています。

願いが大きければ
力も大きくなる

日本では配布活動を行うことに申請が必要です。また日本には多くの慈善団体が存在する中で、最初は殆どどの慈善団体が他の団体と協力して実行していました。ひとりのボランティアが新宿エリアにある街友ケアのZooグループが主催するセミナーで「新宿街友連絡会」の責任者と知り合いました。何度も配布の現場を訪問し同意を受け、二〇〇六年一月、中央公園

北口にて日本分會は初めて街友に温かい食べ物を提供しました。おにぎり、具だくさんの温かい味噌汁、さらに生活用品の袋の配布、各グループの人員配置、現場への移動、車両調達、装備リストなど、誰もが慎重にそして協力して実行する機会でした。大きなことから小さなことまで手を抜くことなく、一緒に働き、最良の結果を残すことができました。しかし、街友たちからの次への期待もありながらも、公園管理局からの中止依頼通知を受け、この場所での活動はこの一度きりとなりました。

しかし新たな因縁があり、二〇〇九年三月、東京代々木公園で定期的に街友への温かい食べ物の配布を始められました。現在は月二回の活動を行っています。何年にも亘り、たとえ数時間しか費やせないボランティアの場合でも、彼らはそのチャンスを活かし、皆のリレーで活動

所内の労働で得たわずかな収入で粽を注文し、鉄格子の向こうで自分は食べられないが、世話になった日本の友人たちに送ってほしい、とボランティアに頼みました。

囚人からボランティアになった人の話ほど感動的なものはありません。二〇一五年、日本で六年以上服役していた王琳恩が刑務所を出て台湾に戻りました。かつて、王さんは、悪友のせいで一家の財産を失い、ギャングで莫大な借金を抱えてしまったのです。そして、麻薬覚醒剤を運ぶ仕事に走り、逮捕されました。

衆生は平等で
愛に差別はありません

刑期四年目に妻が離婚を申し立て、彼は心に傷を負ってしまい、刑務所は、彼に矯正治療と毎日の精神安定剤の服用を強要しました。彼は大阪の駐日代表所に手紙を書き、自分が死んだ後のことをお願いしました。そ

道を踏み外してしまった人の人生が変わり、新たなページを開いていく様子は、ボランティアにとつて大きな励みになります。二〇一一年十月、日本支部

の一階にある「静思書軒」で、仮釈放中の男性がボランティアにお礼を言いに来て、竹箱に寄付をしてくれました。彼の語ったところでは、自分が逮捕されたのは、若い頃に悪徳組織に入って麻薬を売っていたからだとのことです。彼は、慈濟の出版物と十年以上親しみ、いつぱい完動したと感謝しました。「今後、機会があればぜひボランティアに参加したい」と話して帰りました。



■ 出所後、王さんからの手紙。写真 / 日本分會提供

いますが、「ひとつの間違った考えはひとつの間違ったスナップにつながる、後戻りすることは容易ではありません。しかし、覚悟して決意し、良い知識と指導に導かれれば、人は必ず変われるのですよ」と語りました。ひとつの考えは善にも悪にもなりません。しかし、ひとたび善意の種を植えれば、熟成してその花が開くのです。



1



2



3



4

■ 1 おにぎり作り。山友会と協力で隅田川の街友の支援。

写真 / 慈涓

■ 2 大阪西成区で被災地の援助を呼びかける。

写真 / 孫素秋

■ 3 西成区炊き出し支援。写真 / 孫素秋

■ 4 川口市駅地下通路にでいる街友にエコ毛布を配布。

写真 / 蘇美菁

を続けています。この街友への支援を始めた一つのきっかけは二〇〇八年に米国でのリーマン・ショックという金融危機が深刻な失業連鎖を引き起こしたことです。

二〇〇九年の初め、日比谷公園に設立されていた「年越し派遣村」で失業者のための炊き出し活動を行いました。あの時、慈濟ボランティアは半日で人員を集め、一晩で炊き出しの準備をしました。日比谷公園での炊き出し活動により、街友の支援という大きな一歩を踏み出しました。

そして今は毎月の第一週目と第三週目の月曜日に代々木公園での炊き出しと物資配布活動へと繋がっています。さらに長年協力を続けている山友会を通じてフードバンクと連絡を取り、上野恩賜公園で初めての毛布配布を中心とした冬の配布活動を行うことを決定しました。五十人以上のボランティアと五百枚

冬の毛布配布活動を行い、寒い冬にたつぶりの祝福を送りました。

二〇一六年、下着、タオルセット、毛布の大規模な配布活動が再び行われました。慈濟ボランティア達は何度も地元の「さくさくグループ」を通して街友が現在直面している問題を聞き取りました。そして何度も検討を重ね二〇一七年四月、西成区の労働福祉センター裏にある「あいりん臨時緊急夜間避難所」で

の毛布が準備されました。年越し前の十二月、厳しい寒さのなか慈濟ボランティアはお正月の前に街友に暖かい思いを伝えることができました。

「街友達」の

善の思いを募集する

二〇一一年三月十一日、東北沿岸は地震と津波に見舞われました。そこで被災され援助を受けた方々はその愛への御礼を忘れてはいません。慈濟ボランティアは東北地方の被災者のために最善を尽くすと同時に、街友への支援も忘れていません。同年五月、代々木公園で初めての街友へ向けての屋外灌仏会を開催しました。街友たちに「祈りのカード」を記入してもらい、世界の平和と平安を願うとともに、東北地方の被災者への想いも祈ってもらいました。

慈濟ボランティアは温かい食べ物や毛布を配ることをきっかけ

初めての温かい炊き出し活動を行いました。それ以来、毎月第二週の日曜日にその住民に温かい食べ物を提供します。毎回十名ほどのボランティアが参加し、地元の台湾人のほか、中国、インド、マレーシアなど様々な国籍の参加者がいます。

二〇一八年十一月より、あいりん臨時緊急夜間避難所の住民へ温かい食べ物を提供する事に加え、外で泊まる街友へのおにぎりの配布やケアも始めました。

愛のケアは止まらない

二〇二〇年、新型コロナウイルスの流行により炊き出し活動は一時的に中止となりました。しかし、おにぎりや果物の配布に内容を変更し支援は継続されました。また冬の配布活動は中止せず、寒い冬を乗り切る為に、暖かい毛布、下着、スカーフ及びウールの靴下が街友に提供されまし

けに長い間街友と交流し、徐々に互いの信頼関係を築いてきました。ある日、断られることを覚悟しながらも街の掃除活動に彼らを誘ってみました。しかし予想外に何人かの街友が喜んで参加を希望してくれました。

その中のひとり、代々木公園での炊き出し活動が縁となった街友である柏木冬樹さん。彼は支援を受けた後「慈濟をもっと知りたい、證嚴上人に会いたい」と強く思い、二年かけて航空券代を貯金しました。二〇一四年三月八日、彼は夢を叶え台湾へ足を踏み入れ、花蓮の靜思精舎にたどり着きました。帰国後、彼は灰色のボランティアのユニフォームを、二〇一七年にその人生を終えるまでいつも身に着けていました。

愛が関西で広がる

二〇一五年一月、関西ボランティアが西成区の街友に初めて

た。

「コロナ過での緊急事態宣言解除後、東京では毎月の炊き出し活動を再開しました。ただしコロナへの感染を十分に考慮し、内容をお弁当の配布に変更しました。また縁を結ぶためにベジタリアンでは無い普通のレストランへ声をかけた結果、彼らはおいしいベジタリアンランチを作ってくれました。

二〇二一年三月、新宿ではなく、北区和気組のボランティアが自宅近くの川口駅地下通路で月二回夜、十二人ほどの街友の支援を始めました。飲み物、乾物、果物に加えて季節に応じた靴下、毛布、タオルやマスクなども援助しています。慈濟ボランティアは「他人が傷つけば我が痛み、他人が苦しめば我が悲しむ」という思いを持ち、街友の支援を続け、彼らが次の食事のために悩むことなく幸せになれることを願っています。



眼癌と安心の拠りどころ

一筋の光 小児眼がんチーム



■ ボランティアの陳聆韻（左一）と林幸津（立）は子供の相手でもりあがる。写真 / 林真子



■ 1 ボランティアの陳鴻輝（中央）は仕事帰りに立ち寄り様子を見に行く。写真 / 林真子。
■ 2 ボランティアの郭惠珍が常に通って付き添い通訳する。写真 / 林真子



人生は苦しいが、この子たちはもつと苦しいのです。證嚴上人は「菩薩縁は苦しむ衆生にある」と教えます。ボランティアチームはここ数年、繰り返し病院へ行って治療する親子に付き添い、土地勘がなく言葉も通じない親御さんを空港で出迎えたり、病院近くの安いホテルを調べたり、病院や医師への連絡を

小児眼がんが発見され、両親は、時にはジレンマに陥りながらも、「子供の目」と「子どもの命」はどっちが重要なのか、という疑問に直面しました。

■ 訳 / 岩村益典 文 / 林真子 陳雅琴 整理 / 陳詩萍

新しくお父さんお母さんになった夫婦が、子どもの誕生の喜びと興奮に慣れていく中で、ある日、聞いたことのない言葉を受け入れなければならぬことになるのは、思いもよらなかったことでした。その言葉「網膜芽細胞腫」は、通常三歳までに発症し、新生児では一万人から二万人に一人の割合で発生する小児眼がんです。

医療とともに慈濟がよりそう

腫瘍が発見され、両親は、時にはジレンマに陥りながらも、運命の神々との長い戦いに直面し始めます。ある日、彼らは「子供の目」と「子どもの命」はどっちが重要なのか、という疑問に直面しました。選べるのはどちらか一方だけです。でも親としては、目を摘出せずに命を救える

こうした子どもたちは、台湾での治療期間が長い場合が多く、両親は最後の望みをかけて、莫大な治療費を支払うため、借金をしたり、家売ったりして、心残りのないよう努力してきたのです。

手伝ったり、親御さんを日用品の買い出しに連れて行ったりしてケアして来ました。また、通訳グループは、通訳の際に、果物を持ってきたり、お弁当を作って持ってきたり、愛情ある言葉を語りかけたりして、毎回の診療をスムーズに終え、家族の不安を最小限に抑えるように配慮しました。

「これらの母親や父親が直面している課題に比べれば、私たちの努力なんて」と、ボランティア達は、ケアのミーティングで、みんなで協力して、寄り添ってこういう呼びかけ合ったのでした。

ボランティアの林真子は、台湾から泣き声ばかりの国際電話を受けました。「彼女は国際電話で十分近く話してくれたが、何を言っているのか理解できなかった」といいます。それは、日本の診療所に行っていた母親からの電話だったのです。

電話口の母親は、自分の子供のためにあらゆる手段を講じ、あちこちに治療に連れて行きました。そして、視力が回復しないと判ったとき、彼女は必死になって子供の目を摘出しないようにと祈り努力しました。しかし、目は取り戻せなかったのです。最後の望みは、「せめて命は」と運命の神の手から子供の命を奪い返す事でした。でも、「子供は行ってしまった!」のです。母の泣き声から心に強いインパクトを受けた真子さんは、眼がんケアをこれからもよりしっかりと支援していくことと気持ちを新たにしました。

すばらしき大愛のリレー

「眼がんケア」は、二〇一〇年、埼玉県の病院のケースが最初でした。主治医が異動したため治療が継続できず、家族は東京の国立がん研究センター病院に専門医がいると聞いたが、入ることができなかったので、慈濟ホ



■ 第五、六期新芽奨学金受証式。写真/慈澗

慈雨如くの愛で 新芽ケア

裕福な国にも影がある。慈濟日本支部は以前より経済支援として小学生から高校生までを対象とした奨学金制度があり、現在、専門学校生や大学生も対象に奨学金志業が行われています。

訳/鄭文秀 文/河村吉美



■ 希少がんセンターの待合室。写真/林真子。



■ 子どもの相手をするボランティアの紀雅瑩。写真/林真子

日本支部は町田・デザイン専門学校と協力し、二〇一七年四月に第一回目の新芽奨学金を開始、十三名の学生がその支援対象となりました。かれらは年間八回以上もボランティア活動に参加してくれました。

学生をサポートする慈濟ボランティアチームも結成され、か

二〇一七年秋、関西ボランティアが東京で研修会に参加した時、同日行われた新芽奨学金の開会式に参加しました。その時感銘を受けたひとり、中村省吾は大阪へ戻ると数年間かけて

教育は百年樹木の如く長い道の程の志業ですが、こども達が卒業し無事に就職した後でも慈濟との縁を続けてくれることが何よりの慰労であり、明日の希望へと繋ぐ糧となっています。

二〇一六年、慈濟会員からの紹介で町田・デザイン専門学校と縁が繋がり、経済的困難によるアルバイトなどで時間を取られ中退を余儀なくされる学生の就学支援を始めました。

奨学生には社会貢献による慈しみの心も養って欲しく、学業優先としてボランティア体験をお願いしました。学生一人ひとりが一つひとつの種のように大地で太陽と雨の恵みを受け成長するようにと思いを込め「新芽奨学金」と名付けられました。

たくさんの方の芽吹きを願って

これらの相談役をも担いました。かれらが参加した活動には夜の路上生活者のケア、炊き出し、街頭清掃などのほか、それぞれの事情に即して行われました。

学生たちが自分よりも多くの苦勞を背負った人達のことを忘れず、人生の歩みをさらに前へと進める気力を感じて欲しいと願っています。

岩手県大槌町の慈濟ボランティア山崎充さんは地元で経済的な理由から進学を諦めた子供達の存在に心を痛めていました。新芽奨学金の話を知り自分も積極的に活動を進めたいと思い、大槌町平野町長及び教育員会の支援の下、二〇一八年四月、大槌町での新芽奨学金計画が実現を結びました。

二〇二一年、ここでも奨学金制度のおかげで二人の進学支援をすることができました。慈濟ボランティアは、かれらとは普段は携帯でやり取りをしていますが、二か月毎に直接会いに行き近況を知るとともに良き話し相手となっています。

教育は百年樹木の如く長い道の程の志業ですが、こども達が卒業し無事に就職した後でも慈濟との縁を続けてくれることが何よりの慰労であり、明日の希望へと繋ぐ糧となっています。

ランティアは、最初の主治医に連絡して紹介状を書いてもらい、ようやく国を越えた治療を続けることができたのです。二〇二〇年十一月までに約三十人の子どもたちが治療に来ており、一回の治療は四〜七日間。この十年間で、約七十名のボランティアが「眼がんケア」のシフトに参加しました。

「眼がんケア」チームでは、治療のために来日する子どもを知らせを聞くと、チームメンバーに同行する日を決めてもらうことにしています。特に、ボランティアの金媚湘さんは、処置前と処置後の指示をすべて記録し、それを林真子さんが常に補足しているのです。親御さんと医師との橋渡し役として、またグループの心強い味方になっています。

媚湘さんは、「治療に同行する過程で、親御さんが受け入れられず、医師に何度も同じ質問をしてしまうこともあるので、

双方の良き通訳であるだけではなく、親御さんを落ち着かせることも必要です。そして、この通訳ケアの過程で多くの学びを得て成長できました」と言いました。

ボランティアがバトンをつなぎ通訳を手伝う過程で、林幸津さんは、治療に同行するだけでなく、自分の経験を相手に伝え、両親が気持ちの捌け口を見つけれられるように配慮しています。

林真子さんの勧めでチームに参加した周其徳さんは、ケアをするたび、親御さんの苦しみを忘れさせるには、大きな心で大きな愛を示さなければならぬ、と感じました。

黄韻璇さんが、眼がんの医療通訳チームに参加して、最も忘れられなかったのは、不安の中でも治療が成功する可能性を決して諦めなかったご両親の姿です。

井田音心さんは、このような子供たちが不憫で、訪問のたび

に少しでも希望を与えたいと思います。陳雅琴さんは、病院を出ると子供といっしょに地下鉄の駅まで歩き、子ども達の未来の平安と幸があるように祈りました。

親御さんからは、「慈濟が同行してくださらなかったら、この辛い旅をどうやって乗り越えたらいいのかわからなかった」「子どもを治療に連れてこられなかったら、将来後悔していただろう」などの声がいまだに寄せられており、子どもへの愛情は尽きません。

「苦を見て、福を知る、福を惜しみ、福を作る」という静思語の言葉に深く感銘を覚えていきます。この「眼がんケア」で、親が与えてくれた健康を大切に、地域に恩返しをすることを教えてくれた、ケアをさせていただいた三十以上のご家族と自分の人生を歩む勇敢な子どもたちに感謝してやみません。

ビックイイベントの経緯



台湾で幹部研修を終えて日本支部にきた頃、発足九年目の幹部は男女合わせて十数人でしたが支部の大きな力でした。私たちは慈愛の精神を祭事活動に注ぎ、多くの苦難を乗り越えて人間菩薩へと精進して参ります。

訳／王珠惠文／許麗香

■ 1 三軒茶屋で毎月第二日曜日の例会。写真／日本分會

■ 2 宇都宮のお茶会。写真／林真子

ボランティア月例会

支部幹部は宋篤志の三軒茶屋にあるマンションで、毎月第二日曜日に例会を開きました。まず、法華経序或いは三七助道品を詠んで、お互いに感想を述べたあと、手話の練習をしました。支部の台湾料理も心を和ませてくれました。台湾から大勢の幹部が来られたときは、ツーチー入門や菩薩道の体験を話され、多くの方が集まりました。證嚴法師の許しを得て、陳金舜と多くの幹部で今の会所が発足しました。

大きな会所なので月例会の参加者は増えていきます。人が増えると祭事活動の種類も増え、我々の業務も増えました。定例月例会も二〇一六年から不定期にテーマに沿った祭事活動に変わっていきました。

四方八方で地域茶話会

した。時代とともにその形式は徐々に変化して、今では祭事活動は会所で行うようになっただが、最近自宅での茶話会も活気を取り戻しつつあります。

祈福感恩会

会所で行う月例会だけでなく、東京、山梨、長野、新潟、群馬、関西、北海道まで行きました。ボランティアの自宅や地域市民センターなどで茶話会を開き、皆様と大いに語り合い、良いご縁を結びました。

地域のお茶会に大忙し

ツーチーボランティアとの出会いは家の茶話会から始まりま



- 3 お経の手話演繹をするボランティア。写真／慈涓
- 4 ボランティア三兄弟は東北祈福感恩会で来場者の為に歌とギターで祝福しました。写真／李月鳳
- 5 船橋のお茶会で手話の練習をする。写真／林素子
- 6 祈福感恩会で「福慧紅包」をもらい喜ぶ子どもたち。写真／慈涓

二〇〇〇年二月二十六日、品川仏所護念会で一九九九年台湾中部大震災の祈りと初回ツーチー歳末祝福会が行われ、法師の祝福と福慧の祝い袋が参加者に渡されました。初回の祭事だったので、菩薩様から千人会場の参加者七百人余名に祝福がありました。その時も台湾から数十名の高層幹部が手伝いに来ました。皆様のお陰様で一回目が集大成を迎えられ、今日までに成長することができました。

本部の歳末祝福会を参考に、祈福感恩会の内容は多様化しました。恒例の手話劇である入経感演繹を演じるボランティアは数ヶ月前から準備し、



- 1 大阪の祈福感恩会での手話劇。写真 / 林涼綺
- 2 日本分會でのオンライン灌仏会。写真 / 李淑娟
- 3 「香積組」によるお弁当作り。写真 / 李淑娟
- 4 杉並会堂でインタビューをする慈濟攝影班。写真 / 慈涓
- 5。7月の吉祥月で祈りをささげる会員。/ 李月鳳
- 6 バザーで大人気のベジタリアン食事提供の様子。写真 / 劉桂梅
- 7 バザーで様々な物産は人気を集めました。。写真 / 日本分會
- 8 小さな子供も一生懸命お祈りする。写真 / 李月鳳

して母の日を祝いました。参加者が増えるにつれて日本語と中国語の時間帯に分けてから十八年が過ぎました。二〇二一年は「コロナ禍のため、オンライン形式で浴仏儀式を行い、諸仏に祈りを捧げました。自宅待機で募るストレスはそれで発散しました。司会の「禮佛足、接花香、祝福吉祥。」の号令に従い、内面の汚れを払い、清らかな本性を取り戻すことができました。

喜びと感謝の七月吉祥月

二〇〇八年八月十七日台湾本部と同時進行で日本支部初の吉祥月祭事が行われました。みんな一生懸命に祭事内容を企画しました。ランプや花で飾り、七月は吉祥月であり孝行月であるということを祝いました。また、慈善の足跡を振り返りました。

日本支部の三人行事は祈禱感謝会と浴仏節と吉祥月です。

行事担当は企画を立案して、香積菩薩（食事ボランティア）も一生懸命です。大蔵経の日本語翻訳チームも日本大蔵経制作チームの人文慈善美ボランティアも喜びに満ちて年に一度の大祭事の準備をしました。参加者の為に中国語と日本語、そして幹部用の時間帯に分けました。

関西地方は二〇〇三年三月二十一日に豊中国際文化交流センターで初回の祈禱感謝会を行いました。東京から十数名の手伝いがなりましたが、「コロナ禍のため中止になりました。

灌仏会

二〇〇三年五月八日東京支部は初回の浴仏祭事を行いました。SARS蔓延中だったが、浴仏の儀式の他に素食を紹介しました。その翌年から東京支部は台湾本部と同時進行で、五月第二日曜日に降誕節と浴仏節、そ

バザーと愛心園遊会

一九九三年十月二日日本支部は東京中華学校で在日華僑主催の国慶節バザーに参加しました。ブースで販売するほか、色々な出し物に参加して、国慶節をみんなで祝いました。もちろん素食も紹介しました。例えば、ツーチーの野菜ビーフン炒め、スワンラー湯、大根餅などの台湾料理は大変喜ばれました。

一九九九年九月二十四日、井の頭公園の三鷹国際交流バザーに参加して、国際友人と良い縁をいただき、バザーの売上は国際災難に寄付しました。主催側の要望でツーチー青少年学生とボランティアで手話演繹を披露しました。新しい会所に移動してから交流は無くなりました。

バザーのブースに制限があることから、王美玲幹部が日本支部で行う愛心園遊会を企画実施しました。一階から五階までの空間を利用して、人文と環境保



■日本ベジタリアン料理協会のベジタリアン展でエコ酵素の紹介。写真/陳文絲

台湾には八千を超えるエコ教育ステーションと資源回収センターがあります。台湾を起点としてスタートした「エコ志業」は、二〇一九年末迄世界中十九の国と地域に一万を超えるエコステーションと、十一万を超えるエコ活動に携わるボランティアがいます。

日本分會には、二〇〇二年から二〇一二年までエコリサイクル活動を月に二回途切れることなく捧げてきたのは群馬県のボランティア達でした。その後、日本のエコ資源のリサイクルは公共部門の主導になったので、ボランティア達は地域の整理整頓するため街頭掃除をするほ

台湾には八千を超えるエコ教育ステーションと資源回収センターがあります。台湾を起点としてスタートした「エコ志業」は、二〇一九年末迄世界中十九の国と地域に一万を超えるエコステーションと、十一万を超えるエコ活動に携わるボランティアがいます。

日本分會には、二〇〇二年から二〇一二年までエコリサイクル活動を月に二回途切れることなく捧げてきたのは群馬県のボランティア達でした。その後、日本のエコ資源のリサイクルは公共部門の主導になったので、ボランティア達は地域の整理整頓するため街頭掃除をするほ

エコ活動と菜食主義 地球を愛す

環境保護は、略称して「エコ活動」は、慈濟基金會の「四大志業八大足跡」の一つです。

訳/伊佐 文/王秀寧



■ 1 本職の料理人が料理班にて美味しい菜食料理を作る。写真/林真子
■ 2 活動後に片付けを行うボランティア。写真/李淑娟
■ 3 東京の中華学校でのイベント後男性ボランティアが後片付けを行う。写真/日本分會



護テーマエリアが設けられ、十数種類ある台湾料理のコーナーが一番人気があったようです。そのほかにリユース品のバザーもありました。数年行われた行事は会員の誘致にも役立ちました。

祭りに必要な機能チーム

活動チームは祭事を企画し、テーマに合った内容を工夫します。支部の団結を固め、新たなチームの一員を誘致します。そして一緒に社会の苦難に手を差し伸べます。総務チームはハード、ソフト機材を調達し、会場が外の場合は車両の調達、重い機材を運搬し、震災の時は災害時の場合などは、男女ともに張り切って業務遂行に努めます。

食事は何よりも大事である、総務チームの他に香積チームも頑張っています。大型祭事があると十数名がレストランのシエ

フと一緒に厨房に入ります。彼らは我々の料理人として暖かい家庭料理を提供してくれます。生活チームは祭りが開始前に会場を掃除し、参加者にホットする空間で心から分かち合いを受けます。祭事終了後も会場の整理整頓をします。感謝致します。

祭事の都度多くのボランティア菩薩が祭りに参加して、企画、総務、生活、香積などのチームの一員として快く奉仕します。

終わりに

全ての祭事の目的は内部ボランティアの結束と、外部の人間菩薩の誘致にあります。三十年の歳月で時空間が織り成す人と人のご縁に感謝します。感動は新しい一歩を踏み出し、さらに力強い結束のための原動力です。





■ 中華学校でのバザーの隣りに、静思出版の本を展示。写真/藍挺谷



■ エコ活動として牛乳パックでの製作。写真/陳文絲



2



1

■ 1 一回目の料理コンテスト。写真/慈淵
■ 2 新聞紙で造ったエコバック。写真/陳利頻
■ 3 企業にベジタリアン弁当推進の為に提供する。
写真/陳文絲



3

ボランティア王美玲は、二〇一三年に「エコ家族ベジタリアン友好会」を設立し、主にベジタリアン料理の展示と試食、環境と健康問題の共有、環境にやさしいエコ酵素の促進を目的として、不定期的にエコ茶会を開催して環境保護の知識を分かち合います。

二〇一四年にボランティア羅文伶らが、試みに早稲田大学の教師、生徒、ボランティアのために「週一回のベジタリアン弁当」のほか、二〇二一年「コロナ禍期間中に「新芽奨学生」のために用意したベジタリアン弁当も、もっと多くの方々に菜食を受け入れて頂けるよう、ボランティアによって心を込めて作られました。

二〇一四年には、菜食主義を推進する為に初めて企業会社に参入しました。当社の食堂では、従業員が選択できる菜食メインディッシュを用いて二回提供しました。同年、日本分會は台

菜食料理教室地域コミュニティ

二〇一〇年には、ボランティア河村吉美は上人の菜食で地球を救う理念に込め、同じくボランティア望月春江と潘秀鳳を誘い、新大久保で「ベジタリアン料理教室」を開催しました。二〇一二年には高田農場教室、二〇一四年には横浜の「木菜食教室」追加開催しました。ここ数年以来、担当者は増減替わりはありますが、皆同じ目標を掲げてきました。二〇二〇年より、料理教室の活動が一時的に停止されています。

二〇一三年と二〇一四年には、ベジタリアン料理の創作を促す為に、ベジタリアン料理コンテストが二回開催されました。会場の雰囲気はとても暖かく、料理を作る側と食側共に幸せでした。二〇一四年は「ベジタリアン教室」四周年記念感謝茶会と「ベジタリアン忘年会」を開催しました。二〇一五年には旧暦正月に、盛大なベジタリアンの食事会を開催するに当たって、望月春江らは全身全霊を尽くし作った菜食メニューは間違いに忘れられませんでした。

二〇一二年から二〇一六年までの隔月刊誌は定期的「ベジタリアン料理レシピ」を掲載しました。二〇二〇年には「マイベジタリアン行い」シリーズに変更し、南関東と北関東エリアのそれぞれのアンボランティア達からベジタリアン料理を共有します。

湾の范春美先生を招き、野菜の調理法や免疫力の向上について健康セミナーを開催しました。

二〇一七年は、「生」ミゼ「の環境保護コンセプトを推進する為にベジタリアン交誼會が開催され、「11世界野菜自覚の日、環境にやさしい地球、地球を愛する『ベジタリアンアクション』」などの活動が行われ、より多くのベジタリアンが育つように呼びかけました。

交流のきっかけ 願掛屋台料理

パンデミックの影響により、上人は世界中の慈濟基金會のメンバー達に菜食主義でウイルス感染対策に直面するようお願いされており、全員は菜食主義の促進をより積極的に動員しています。その上、すべての活動はオンライン方式に変更されているため、読書会や手作りベジタリアン料理教室もオンラインで共有され、長い間自粛で家にい

る人は家族のために美味しい料理を簡単に作る事ができます。

慈濟基金會は毎年十月十日東京中華学校で開催される園遊会でチャリティー屋台に出店するほか、ボランティアの子供達が在学しているインターナショナルスクールと鎌倉の建長寺で開催された3・11災害救援活動に参加し、ベジタリアン・チャリティーセールを行いました。

一般的なチャリティー販売はほとんど肉等の葷食品は多かったです。出店する事により、特に菜食焼きビーフンや酸辣スープ等伝統的な台湾郷土料理を紹介し、美味しさは一般に葷食に決して負けない事を見せることができました。

ベジタリアン料理は健康に有益な食事であり、地球を愛する最も簡単な方法です。日本分會はこれからも菜食主義を積極的に促進し、より多くの人々を菜食主義者の仲間入りする様に呼びかけて行きます！



■ 早期流通処の内装の雰囲気は温かく自分たちの家のように計画した。写真 / 慈涓

静思小築は静思精舎から始まり、人間の心を浄化するという證嚴法師の精神的使命を伝えてゆくことを担っている。目標は「人間の心を浄化する」ことであり、人間菩薩を募集する拠りどころともなっている。

二〇一六年に
静思小築が正式に成立

二〇一六年に静思小築が正式に成立した。その頃、静思小築の雰囲気は温かく自分たちの家のように計画した。人手が必要な時には皆自主的に協力すると話した。慈濟に興味を持ち立ち寄った訪問客に静思茶と菓子を用意してもてなすが菩薩募集の最初の一步だった。

二〇一二年十一月、活動の進展と会員の増加に伴い活動空間を有効活用するため内部改修を実施、二〇一三年初頭に完成した。厨房に関する日本の法律上の理由で静思文物流通処は世界の他の静思小築のように食べ物や飲み物の販売はできないが、ここに来るすべてのボランティアと訪問客に慈濟の温かさ素晴らしさを感じてもらったための空間を提供することができた。

證嚴法師の慈しみや憐れみの心に感謝。同時にテーブルと椅子の寄贈だけでなく設計監督を務めた台湾の高銓徳さん率いるチームと、台湾からシステムキャビネットなどの機器を運び寄贈してくれた台湾のボランティア数名に感謝する。工事中は一部のボランティアが分会に寢泊まりし手伝ってくれた。移動する機器が約六メートルあると聞くと、会社員、学生のボランティア達も退勤や放課後に応

流通処から 静思小築へ

訳 / 水谷瑞芳 文 / 河田瑞穂・黃韻璇



■ コロナ禍により培訓課程はオンラインに変更された。写真 / 慈涓

守る力 新たな人材を育む

訳 / 王譽葵 文 / 許麗香・王秀寧

ボランティア活動を持続的に行うためには、新たな人材の育成と裏で長期的に支え続けることが必要である。培訓課程（トレーニングコース）は、慈濟ボランティアをいわゆる認定済の委員や慈誠にまで育てるためにあります。

培訓課程（以下培訓）の内容は、上人の教えを精舎師父やシニアボランティアを通して慈濟の理念を学び、それが慈濟の各支援事業の基礎となります。精進課程（インテンシブコース）は、以前は慈誠や委員向けでしたが、コロナ禍でオンラインとなり、今はすべての志工が受けられます。

トレーニングの現地化

台湾の培訓制度では、規定の授業とボランティア活動に参加し審査を経て、正式に認定を受けます。当初、日本分會にはこの制度がなく、二〇〇〇年から

日本でも培訓を始めました。その頃の日本分會は三軒茶屋にあり、培訓の場所も毎月の借用でした。初回の培訓は蒲田の市民センターで行い、その後、ペアレ新宿、二〇〇一年十二月に現支部に越してからは現在の様に培訓を続けています。

開始当初は教材も少なく許麗香（当時副執行長）に依頼し台湾から録画や動画などを集め日本へ郵送してもらいました。またシニア委員は積極的に講師を担当してくれました。

日本分會での培訓は、初め工夫しながら中国語と日本語の同時通訳で行いました。二〇一五年、二〇一九年、それぞれ四人の日本人ボランティアが認定を受け、それからは午前は同時通訳、午後は日本語の体制で行い、二〇二〇年五月以降は、コロナ禍によりオンライン変更、委員や慈誠がすべて日本語で行っています。

教えの継承

日本分會初期は培訓のために関西地方から十数人のボランティアが東京の許麗香の家に滞在し、群馬県と山梨県の人は、遠距離を数日通っていました。その後、人数が増え、群馬、大阪、神戸の現地で培訓を行っています。

関西では神戸から始まり、大阪豊中地域センターと続き、東京からは隔月でメンバーが来訪しサポートしてきました。二〇一〇年、現在の大阪に引っ越してからは、そこで培訓が続いています。

培訓のサポート以外にも会計をサポートする人、各活動別にサポートする人、ボランティアの個人データ管理や、組織運営の記録など長年に亘りサポートする人もいます。

このように誰もが色々な分野で必死に歩み続け「教えの守護者」となっています。



援に駆け付けてくれた。さらに
工事スタッフに茶菓子を用意す
るボランティアなど、今日の小
築を皆で少しずつ創り上げた。

二〇一六年九月一日、静思小
築は正式に設立され営利事業と
なり、より幅広い商品やサービ
スを提供できるようになった。
ここは誰もが仏の教えを以て集
い、真心を込めて出会う道場と
なった。みんなの無私の奉仕は
日本分會に美しい愛の足跡を残
した。



■ 1 書軒でちびっ子ボランティア達に
説明会を開く。写真/李月鳳

■ 2 台湾から来たベテラン慈濟ボラ
ンティアが体験談を話す。写真/慈涓

小築チームのルーツ 探し求め精進する旅

二〇一三年六月十七日から十
九日まで、チームのボランティア
六名が初めて花蓮精舎に帰
り、「ルーツを探し求める旅」
のイベントに参加した。目的は
如何に小築を訪れる方に静思精
舎の温もりを感じ取ってもら
い、證嚴法師の教えを来客の心
に伝えるか、その方法を学ぶこ
とだった。現在も小築チームの
ボランティアである河田瑞穂さ
んは、證嚴法師の著書や經典に
感銘を受け慈濟に入り静思人文
をより多くの人に広げていくこ
とを決意されている。

河田さんは、「ルーツを探し
求める旅にとても感謝してい
る。台湾静思精舎の師父、講師
や書店の店長らが語った話を聴
いたことで、責務を果たせる小
築のボランティアになりたいの

なら、仏の教えを念頭に置き仏
の教えを行動に移さなければな
い。なぜなら、小築のボランティ
アの言動は人々の慈濟に対する
イメージに影響を与えるから
だ。だからこそ、小築のボラン
ティアは静思人文の各種の出版
物をよく読み理解し広げていく
方法を学ぶべきだと思った」と
話した。

「心霊講座」を通して人生の 叡智にこそ心が動されて

静思小築の設立後、度々「心
霊講座」を開催している。各部
門の経験豊かな方を招き、人生
の経験や知恵を語り伝えたり、
時には東洋・西洋医学の医師に
よるヘルスケアの知識を教え伝
えた。日本督導の陳金發さんの
人生物語や、李阿利さんの静思
茶道人文など、みんなが誠意と
愛情を持ってより多くの人間菩
薩を引き付け、共に社会に利益



■ 3 慈濟病院の漢方系の陳建仲医師が
体のサインを見分ける方法を教える。
写真/慈涓

■ 4 ボランティアの陳麗淑英は、静思
書軒でのお茶会で、台湾本部の慈濟月刊
誌を紹介する。写真/李淑娟



をもたらします。その中で河田
さんが最も感銘を受けたのは台
北の万華区の楊茹云さんが行っ
た「心霊講座」でした。娘の黃
韻璇さんがバイオリンを弾き、
小築にお茶の香り、バイオリン
の音、歌、笑いが溢れ、さらに
證嚴法師の新たな著書や静思商
品が紹介された学びべきケース
でした。

ちびっ子ボランティアが お茶を出し 静思商品を紹介

「心霊講座」のほか、チーム
は手話の演劇、お茶のエチケッ
ト、静思の鐘と太鼓などを含む
静思ちびっ子ボランティアのた
めのコースを開催した。それを
通じて親御さんには一緒に静思
人文についてもっと学ぶように
働きかけたいと考えていた。小
築のボランティアだった羅文伶
は、子供たちが静思人文におい
て身をもって体験し努力して人
間関係に善の縁を結び、それを
自分の身に還元し、人生の価値
を見いだすことができることを
望んでいると語っていた。

また静思小築チームは、イベ
ントを行う度に静思商品を紹介
する努力を惜しまない。ボラン
ティアは美味しい「小葉紅茶」
や「牛蒡茶」で訪問客をもてな
しながら慈濟を紹介する。ボラ
ンティアの陳麗芬と吳桂英は静
思商品を使って菓子や料理を開

発することがよくある。イベン
トがあるときはいつでも家族が
安心して食べられる「淨斯」料
理をみんなと分かち合う、健康
な体を持つには、より菜食を食
べることだ！

證嚴法師は、「心があれば幸
運がある、希望があれば力があ
る」とおっしゃる。菩薩の道を
歩むのは容易ではないが、一人
ひとりの小築のボランティアは
世界に仏法と大愛を広めて、互
いに協力し合い、より多くの人
間菩薩が慈濟の家族になること
を願う。

小築を訪れるすべての人に温
かい雰囲気を感じてもらい、有
形の書を通して静思人文を広
め、誰もが素晴らし無形の仏法
を深く理解し吸収できるように
「人々の心を浄化する」ことを
究極の目標とする。



地域における生涯学習 人間死ぬまで勉強

訳／張靜華 文／陳雅琴



■ 1 日本分會での写経教室。
写真／李淑娟
■ 2 静思茶道を体験する様子。
写真／李淑娟



■ 3 草月流の生け花教室で授業の様子。写真／慈涓
■ 4 二胡教室で演奏のための授業の様子。写真／李淑娟
■ 5 手芸教室でクリスマス用飾り製作の様子。写真／陳雅琴
■ 6 手芸教室で中国結びを実践する。。写真／林貞子
■ 7 中国語教室での授業の様子。写真／慈涓

中国語には、「生きていく限り学び続ける（人間一生勉強だ）」という諺があるが、変化の目まぐるしい時代においてその社会の変化に対応するには学び続けるしかない。

慈濟日本分會は、以前より地域での色々な活動を通じて様々な生涯学習を長年に亘って開催してきた。初期には日本語会話教室や気功教室があり、次いでボランティアの許麗香さんと張好さんの主催で「静思茶道体験レッスン」を開催し、いずれも好評だった。そして井田音心さんの「二胡教室」、王美玲さんと歌愛好家たちによる「合唱団」、手芸の経験がある劉月英さんによる「中国結び教室」、及び昨年コロナ禍で開催した短期のパソコン教室「zoomの使い方」等があり、時代の変化に合わせて活動を続けてきた。

二〇二〇年九月から日本分會はボランティアがそれぞれ

開催した教室を統合し、「生涯学習講座」として新しく開設した。現在「生涯学習講座」には、大人の中国語教室、写経教室、草月流生け花教室、静思茶道教室と手芸教室の計五つの教室がある。

大人の中国語教室は二〇二〇年四月に開始し、間もなく二年目を迎える。授業は日曜日のみだが、生徒にはサラリーマン、定年退職者、主婦の他、最近では中学生も参加している。外国語は年齢を問わず学ぶことができ、学びに遅過ぎるということはない。

二〇一七年八月に始まった写経教室は、煩わしい日常生活における心静かなひとときであると担当者の林秋里さんは語る。常に時間に追われて忙しい現代社会に生きている人々にとって、写経は心を落ち着かせることができ、とても良い選択肢である。生け花については、二〇〇

五年に鄭淑英さんが日本支部で初めての「真善美生け花教室」を開催した。五年間で、単に花を生けるだけではなく、「一輪の花も一つ世界であり、一枚の葉でも如来の如く」という仏陀の教えや慈濟の四大志業・八大法印の理念をも教え伝えた。当時の生徒の藤本裕子さんは、今や講師として活躍している。

草月流生け花教室の指導者である杉山麗杏先生は、毎月二回のレッスンで、花材の種類に拘らない自由で創作的な生け方を伝授している。手芸教室は、生徒の潜在能力及び無限の想像力を発揮することを目指した、オリジナルな物作り教室である。

日本分會は前述の講座以外にも新しいレッスンや教室を企画中であり、新型コロナウイルスの感染状況が改善すれば、他分野の専門家や講師を招くことも考えている。

旧ソ連の作家であるマクシム・ゴーリキーさんは、「人生を無駄にしたくないならば、一生学んでいくしかない。」と語った。学ぶことによって自分の潜在能力を発揮できるばかりでなく、積極的な考え方や優雅で穏やかな振る舞いを身に付け、一生学び続けることにより、健康や若さを保つこともできると思う。

若き力 慈青 回顧録 またその展望



■ 1996年7月、日本分會は「慈濟青年部」を設立しました。写真/日本分會提供

■ 訳/井田龍成 文/張秀民・鍾佳玲・謝玉潔

日本の慈青(慈濟の青年)の年齢層は幅広く、日本語学校の学生、大学生、就労ビザを持つ人などがいて、これらの若者は「慈青」と呼ばれています。

一九九一年に日本分會が設立された時は留学生がいまいましたが、まだ当時は「慈青」という名称はありませんでした。彼らは積極的に月刊誌のレイアウト作成や記事の執筆、イベントの企画などあらゆる面で協力してくれました。また、学業に影響が出ない範囲で見回りや東京中華学校のチャリティーバザーの他に、群馬三鷹国際交流バザーで募金活動や手話の披露などもしました。

日本の慈青を振り返って

多くの留学生の参加を得て、一九九六年六月十一日、初代執行長の謝富美の支持のもと正式に「日本慈濟大專青年聯誼會」(略して「日本慈青」)を設立しました。更に多くの人を迎え入れるために屋外イベントの企画などを行い、花蓮での合宿にもグループで参加しました。

二〇〇一年、日本分會が現在の場所へ移動した当初、九階は女子寮として利用され、会員の子女は慈青の活動に参加していませんでした。分會の活動の他に、二〇〇〇年から始めていた定期的な企画活動も行っていました。二〇〇七年からは、毎月第三日曜日に路上清掃活動を行い、三日間の合宿も実施しました。

毎月の清掃活動では、全員が分會に集まった後、歌舞伎町から職安通りまで清掃を行って分會に戻りました。「おはようございます」と挨拶をして道を譲り合っていました。清掃が終わった後分會に戻り、拾ったゴミを分別し、使用した道具とベストを片付けました。分會の師姑や師伯たちはいつも朝食を用意して暖かく迎え入れていました。清掃活動は二〇一一年頃まで続けられていました。

当時、慈青たちは恐れる、躊躇することなく自ら日本分會へ行き救援活動を手伝いました。

若者たちは、ほぼ毎日分會に泊まり込みで情報収集や資料作成、見舞金配布など重要な役割を担いました。怖かったか? もちろん怖かったです。誰も引き下がりがありませんでした。

疲れたか? 東北へ支援活動へ行く途中で寝ている若者たちをみていて疲れない訳がないと思いましたが、活動できることは幸せなことで、人助けの喜びとは別に、沢山の良いつながりができました。忙しく救援活動を行う中でお互いに理解を深めて協力しました。

延々と続く愛

二〇一一年の年末、私たちは救援活動の経験を伴って、心の故郷である花蓮へ帰り、海外慈



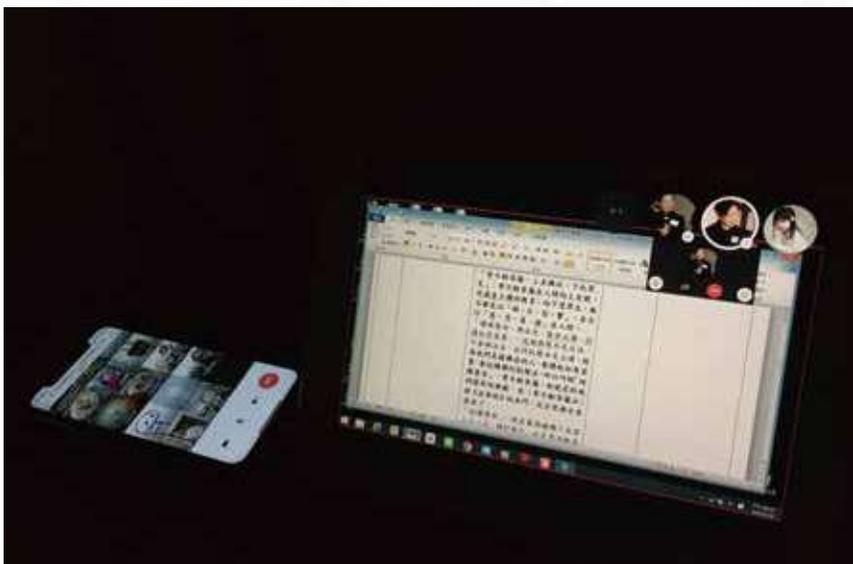
- 1 慈濟青年部が街頭募金用のポスター製作をする。写真/慈涓
- 2 慈濟青年部が街路清掃作業をする。写真/陳文絲
- 3 東日本大震災での見舞金受け付けでも慈濟青年部が手伝う。写真/蘇美菁



毎年、日本慈青會は新宿御苑にて野外での勧誘活動を行い、新しい加入者を迎え入れて桜の花見をしていました。毎年母の日に行われる感恩會では、慈青が世話になった人々に感謝しました。また、新しく入った人は、三日間の合宿などを通して慈青への理解を深め、互いに協力しました。

被災地でのケア

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災は、未曾有の衝撃をもたらしました。震災後、東北は甚大な被害を受け、救援活動は待ってはもらえませんでしたが、一刻を争う状況でした。



■ 2017年 SKYPE を利用しオンライン読書会の開始をする。 写真 / 慈涓

四年前世界の多くの慈濟人はお互いに「今日は上人様の教えを聴きましたか?」と訊きあっていました。そして慈濟人は、毎日上人様の教えを聴く以外に、どうしたらその教えを忘れないか、又どうしたらより多くの人に参加してもらえるかを考えました。そして 2017 年からオンライン読書会と地域での読書会、道場にての読書会、この3つを並行した活動を開始する事にしました。

オンライン読書会の 開設と今後の展望

訳 / 真鍋誠 文 / 陳麗芬

少しずつゆっくりと悟るか、それとも忙しい社会の中で一気に悟るか、どちらも悟りの智慧を増やします。日本分会は二〇二〇年許麗香さんが【無量義経】等、證嚴上人が教えを説いた仏典の系列、〈衲履足跡〉を共に学ぶ事を主題としていました。その後茶道と一本化し、「書香茶香読書会」としました。そこでは【無量義経】或いはく【静思法髓妙蓮華・序品】を繰り返し朗読します。それは長年多くのボランティアを引きつけてきました。

オンラインで仏法を伝え
オンラインで仏法を聴く

四年前から SKYPE を利用したオンライン方式を導入し、その年五月末から毎週一回のオンライン読書会を開始しました。聴き方、進行方法、伝え方、説明担当者は会に先立って目を



■ 1 慈濟青年部が全員家族の企画を行う。写真 / 慈涓

■ 2 慈濟青年部が料理を作って先輩ボランティアに提供。写真 / 林貞子

■ 3 慈濟青年部の張馨云(右一)は山梨県のボランティア達にビデオ編集を教える。写真 / 慈涓

青向けの研修合宿に参加しました。他国の慈青と同窓会のように交流できて、皆喜んでいました。見舞金配布活動を終えた後は、東北地方では色々なケア活動を行いました。

日本慈青たちも現地に根差すことを学び、東京大学の学園祭に出店して学生たちに東北での支援活動について話してしまし

た。また、山梨県に行つて田植えや稲刈りなどに何度も行つたり、老人介護施設と一緒に歌を歌ったりしました。ある時は東北で雪掻きなども行いました。私たちは、一つ一つが善の種であり、それが芽を出して実を結び日がくることを信じています。

日本慈青の大部分が留学生のため、三、四年周期で行き来しています。最終的に日本に残る人は多くないですが、それぞれの出会いが素晴らしい縁で、いい思い出です。日本での慈青としての生活は充実していて、とても幸せで感謝しています。最近では、ボランティア会員の子どもたちや、日本で勉強や仕事をしてきた若者たちが残り、イベントでの音響操作や通訳などをするなどして休日を通りかかっています。愛が絶えず満ち溢れるよう願っています!

通し準備します。この事によって合心組の皆は毎週木曜日の夜の各々十分間で上人様の一週間の教えの重点をおぼえていきます。これは今日も継続されています。

二〇一七年六月全世界の慈濟の幹部が台湾に集まり四合一精進營(慈濟の教育、訓練)に参加しました。日本慈濟人は壇上でオンライン読書会で会得したものを述べました。毎日上人様の教えを聴く事はすべての慈濟人の日課ですが、聴いた後再度復習します。日本分会はオンライン読書会とともに率先してそれらを始めました。

その年の十二月南和気は大愛テレビ局で放映された静思農語(當時は〈法師品〉と呼ばれた)を毎週金曜日の夜、復習の為にオンライン読書会として立ち上げました。最初参加者は十人余りでしたがその後多い時には四十人近くの人が参加するように

なりました。担当者はZoom

を利用して感想を述べました。その他「LINE」でも二組のグループが同時に視聴していました。

当時オンラインの接続はボランティアの陳麗芬さんが担当していました。家の中でパソコンの「Screen」に流れる映像だけでなく、家族のスマホを借りて「LINE」にも接続しました。二〇二〇年7月以降は日本分会の視聴品質を上げる為、分会にてオンラインでのZoom利用方法の講義を3回行いました。説明はボランティアの黄韻璇さんと潘慈芬さんの二人が担当しました。ボランティア達の反応は非常に良好でした。担当の団体は家まで出向いて説明にあたりました。そしてついに若者からお年寄りまで皆さんが何の支障もなくZoomのソフトを操作する事が出来るようになりました。皆がZoomを使用して画面越しに発表する人を観る事が出来ます。オンライン読書会は

新しい方向に進進しています。

「コロナ禍でも読書会に心に落ち着きを」

多くのボランティアは【法華経】を知らないところから始まり、そして努力した結果仏法が近い存在になりました。オンラインを始めた頃の唱え方は緊張のあまりテストを受けているようにでしたが、現在に至っては立て板に水の如くスラスラ言えるようになりました。この期間にも紆余曲折が有りましたが、読書はいつでも出来ます。始めた頃は難しいかったことが今日に至っては至極簡単になりました。以上の事を考えると何事もやり抜くことで希望が見えます。希望が見えたからやり抜くではありません。

昨年からのコロナの感染が拡大しました。《法華経》第七品化成城喻と同じく上人様は大通智勝佛のように仏法を伝える人々の

心を落ち着かせます。常駐して

いる師父は法華経の中の十六王子のように上人様の《静思法髓妙蓮華》を各所に伝えます。全世界の慈済人の読書会は菩薩が地上に舞い出る様に、食事を作る菩薩、年配の菩薩、若い菩薩、皆一緒に読書します。人々の心は大地が揺れ動くほどの歓喜で満ち溢れています。

北和気読書会はコロナ感染拡大でパニックが起ころののではと考えました。昨年三月から地域で夜の祈祷及び素食の推進、皆さんの善の念を発揮するよう願いました。最も大切なのは慈済人がお互いに関心を持つ事です。日本ではコロナ感染拡大による緊急事態宣言が人々の心を暗くしています。しかしオンラインで繋がることで毎日顔を

見、お互いの無事を確認できます。声を聞くことで皆の不安の心が少し和らいだようです。去年七月から祈祷の後、新しく読書会を増やしました。皆の

心には喜びが満ち溢れいま

した。毎週月曜から金曜の夜、毎日互可能な方法で仏法を享受し心から喜びました。あるボランティアは「以前は皆さんと一緒に活動する事がほとんどありませんでしたが、この機会を頂いてからは皆さんの距離がずっと近づいた感じがしています。仏法の基礎が無い私でも、このような皆さんと一緒に活動する機会を頂いて自信が湧き、自信を持って話す事が出来るようになりました、そしてゆっくりゆっくりと仏法を吸収しています」と話していました。

これ以外にも南和気読書会もコロナ感染が始まってからの活動はほとんどオンラインに変わりました。毎週火曜日午後八時上人様の大哉教育、毎日の大懺悔、祈祷、素食、素食を広く進める、この教えの伝達はオンラインにて一年以上も続き、ボランティアだけでなく会員も常に参加していました。このよう

な不安な環境の中、安心して活動が出来る事を皆はこども喜んでています。

各地域に参加の機会が更にもなるように、毎週火曜日午後、南和気のオンラインの企画を続けてきました。招待した地域のボランティアが参加し、協力組と会員が交流を深め仏法を深く

理解しました。現在各地域には十余りの読書会がありますが、仏法は各個人の心の中に流れています。各々個人が説法者であり、伝法者、行法者なのです！

関西地区も去年八月から第一回の金曜日のオンライン読書会を開始しました。その後水曜班と第四土曜班の復習班を増設し

ました。仏法を唱える時、唱えるだけでなく、自分の生活の事や仕事の上での煩わしい事にぶつかつた事を話し、仏法を持って自分を反省します。そして一年余りが過ぎ、人々はお互いに

精神の成長を感じています。話せない人、またあまり自信がない人が、現在に至っては、

その内多くの人達が、何でも上手に唱える事が出来るようになりました。上人様が仰った仏法を知らなくても大丈夫です。毎日少しずつ聴き、それが累積され知らず知らず理解しているのです。亀とウサギの競争のように継続すること、そして急げ

ないことそれが重要なのです。



■ 1 南関東グループの Zoom 読書会の様子。写真 / 南関東グループ提供
■ 2 関西グループの Zoom 読書会の様子。写真 / 関西グループ提供
■ 3 北関東グループの Zoom 読書会の様子。写真 / 北関東グループ提供

茹素護生勤造福 共善愛灑信願行

菜食とは衆生を守り福をもたらす
共に善道を信じ志を立て道を歩む

2022 ◦ 令和 4 年

祈福感恩會

期日：1/23 日 心からお待ち
しております

時間：午後 13：00 (入場)
13：30 (開始)

場所：慈濟基金會日本分會

感召天地，
靈方妙藥是茹素；
同心同道，
廣布大愛在人間。



【日本慈濟世界】
ホームページ

台北慈化